

博 多 19

—博多遺跡群第44次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第247集

1991

福岡市教育委員会

博 多 19

—博多遺跡群第44次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第247集



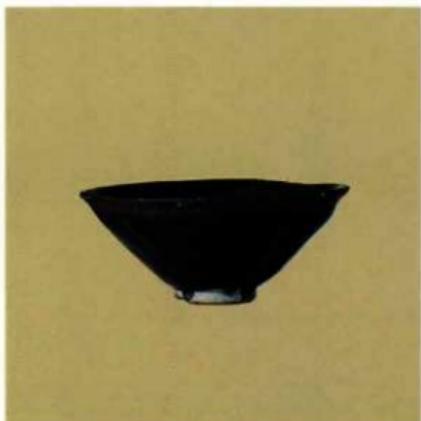
遺跡略号 HKT-44

遺跡調査番号 8857

1991

福岡市教育委員会

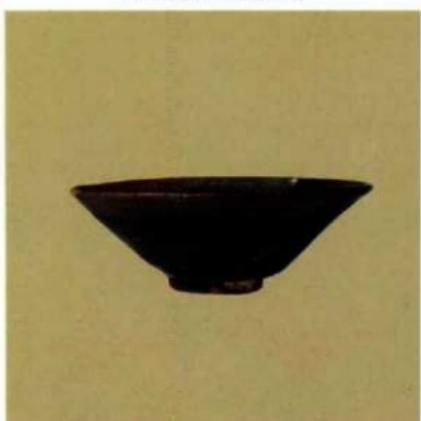
卷頭図版



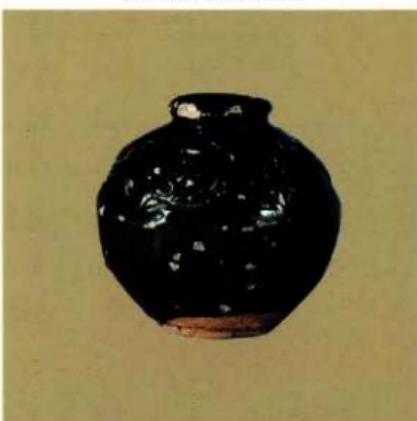
天目茶碗（SE52出土）



天目茶碗（SK37出土）



天目茶碗（SK69出土）



双龍火炎珠綠釉小壺

序

古くから大陸文化の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに60次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書はビル建設に伴って実施された第44次調査の概要を報告するものです。国際貿易都市「博多」の繁栄を示す輸入陶磁器の発見等興味深い成果があがっています。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまで御理解と御協力をいただいた㈱九州住宅流通サービス、ならびに関係各位に対し、心から感謝を表する次第です。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　言

1. 本書は柳九州住宅流通によるビル建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が昭和63年度に発掘調査を実施した博多遺跡群第44次調査の概要の報告である。
2. 本書に掲載した造構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎の他、池田祐司（現福岡市教育委員会埋蔵文化財課）、杉山富雄（現福岡市埋蔵文化財センター）、川上洋一（九州大学）、中村啓太郎（福岡大学）が、撮影は佐藤があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測・撮影は佐藤があたった。
4. 製図は造構を藤村佳公恵、遺物は佐藤が行った。
5. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。
6. 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

目 次

序

I	はじめに	
1	調査にいたる経過	1
2	調査の組織	1
II	遺跡の位置と環境	2
III	発掘調査の概要	4
IV	遺構と遺物	4
1	検出遺構	4
	井戸	4
	土壙	5
2	出土遺物	9
V	小結	39

表 目 次

第1表	出土銅錢一覧表	37
第2表	出土土器計測表 (1)	40
第3表	出土土器計測表 (2)	41
第4表	出土土器計測表 (3)	42

挿図目次

第1図	博多遺跡群発掘調査地域図	2
第2図	博多遺跡群44次調査遺構配置図	折り込み
第3図	博多遺跡群44次調査地域周辺図	3
第4図	博多遺跡群44次調査層位	4
第5図	井戸尖測図 (1)	6

第6図 井戸実測図 (2).....	7
第7図 井戸実測図 (3).....	8
第8図 土壌実測図 (1).....	10
第9図 土壌実測図 (2).....	11
第10図 土壌実測図 (3).....	12
第11図 土壌実測図 (4).....	13
第12図 SE29・40出土遺物実測図	15
第13図 SE47出土土器実測図 (1)	16
第14図 SE47出土土器実測図 (2)	17
第15図 SE47・52・60出土遺物実測図	18
第16図 SE81・82出土遺物実測図	19
第17図 SK35・37出土遺物実測図	20
第18図 SK38出土遺物実測図	21
第19図 SK41出土遺物実測図	22
第20図 SK58・61出土遺物実測図	23
第21図 SK64・65(1)出土遺物実測図	25
第22図 SK65(2)・67出土遺物実測図	26
第23図 SK68出土遺物実測図	27
第24図 SK69・70出土遺物実測図	28
第25図 SK71・72(1)出土遺物実測図	30
第26図 SK72(2)出土遺物実測図	31
第27図 SK75出土遺物実測図 (1)	33
第28図 SK75出土遺物実測図 (2)	34
第29図 SK76・84出土遺物実測図	36
第30図 包含層出土遺物実測図・銅錢拓影.....	37
第31図 墨書き陶磁器実測図.....	38

図版目次

- | | | |
|------|----------------------|--------------------|
| 図版1 | 1. 第Ⅰ面全景（東から） | 2. 第Ⅱ面全景（西から） |
| 図版2 | 1. 第Ⅲ面西半部（東から） | 2. 第Ⅳ面東半部（東から） |
| 図版3 | 1. 第Ⅳ面東部（東から） | 2. 第Ⅳ面北西部（西から） |
| 図版4 | 1. 第Ⅰ面南東部分（東から） | 2. 第Ⅰ面鉄滓散布状況（北西から） |
| 図版5 | 1. SE29井戸（南から） | 2. SE52井戸（南から） |
| 図版6 | 1. SE59・60井戸（北から） | 2. SE60井戸（西から） |
| 図版7 | 1. SE60井戸（北から） | 2. SE73井戸（南から） |
| 図版8 | 1. SE81井戸（西から） | 2. SE82井戸（東から） |
| 図版9 | 1. SK35土壙（南東から） | 2. SK37土壙（東から） |
| 図版10 | 1. SK38土壙（南から） | 2. SK58土壙（西から） |
| 図版11 | SE29・40出土遺物 | |
| 図版12 | SE47出土遺物（1） | |
| 図版13 | SE47出土遺物（2） | |
| 図版14 | SE47出土遺物（3） | |
| 図版15 | SE52・60・81出土遺物 | |
| 図版16 | SE81・82出土遺物 | |
| 図版17 | SK35・37出土遺物 | |
| 図版18 | SK38出土遺物 | |
| 図版19 | SK41出土遺物 | |
| 図版20 | SK58・61出土遺物 | |
| 図版21 | SK65出土遺物（1） | |
| 図版22 | SK65出土遺物（2）・SK67出土遺物 | |
| 図版23 | SK68出土遺物 | |
| 図版24 | SK69・70出土遺物 | |
| 図版25 | SK71・72出土遺物 | |
| 図版26 | SK72出土遺物（2） | |
| 図版27 | SK75出土遺物（1） | |
| 図版28 | SK75出土遺物（2） | |
| 図版29 | SK76・84出土遺物 | |
| 図版30 | 包含層出土遺物・墨書き陶磁器 | |

I はじめに

1 調査にいたる経過

1988年、株式会社ロイヤル航空から本市に対して博多区冷泉町201-3番地内におけるビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は旧くは大蔵省財務局の管理地であり、北側に隣接する森精機と第百生命の社屋を含めた敷地内に一つの建物をつくるという計画である。申請地は周知の遺跡であるところの「博多遺跡群」に含まれており、その南側ではビル建設に伴って1983年度に博多遺跡群第22次調査が行われている。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1988年10月17日に試掘調査を実施した結果、地表下1.5m~1.7mで遺構・遺物等の文化財が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、現状での保存は困難であり、やむを得ず記録保存のために発掘調査を行う運びとなった。北側に隣接する森精機の社屋は現況の地下室のため地表下4.4m~4.7mまで削平をうけており、第百生命の社屋については地下二階の構造となっており、遺構は残っていないと判断され、調査の対象からははずされた。その後、事業主が株式会社ロイヤル航空から株式会社九州住宅流通へと移り、福岡市との間に調査および整理作業に関する委託契約を締結した。発掘調査は年度末も押し迫った1989年2月1日から3月31日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 株式会社九州住宅流通

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

調査統括 埋蔵文化財課長 柳川純孝

第1係長 折尾学（前任） 第1係長 飛高憲雄

庶務担当 松延好文

調査担当 試掘調査 常松幹雄

発掘調査 佐藤一郎

発掘作業・資料整理協力者 井手謙一・岩橋真・高田勘四郎・高田喜一郎・荻尾行雄・藤田圭三・松原高博・相川和子・木浦志麻子・田中ヤス子・平尾澄子・平野志津江・藤井伊都・藤野邦子・藤村佳公恵・丸山信枝・向亞由美・森木久美子・山下智子・吉田恵子

II 遺跡の位置と環境

古代より大陸文化の門戸として重要な役割を果たしてきた都市遺跡「博多」の発掘調査は地下鉄工事に伴う調査を嚆矢として以来、ビル建設・道路建設等の開発に伴う記録保存のための

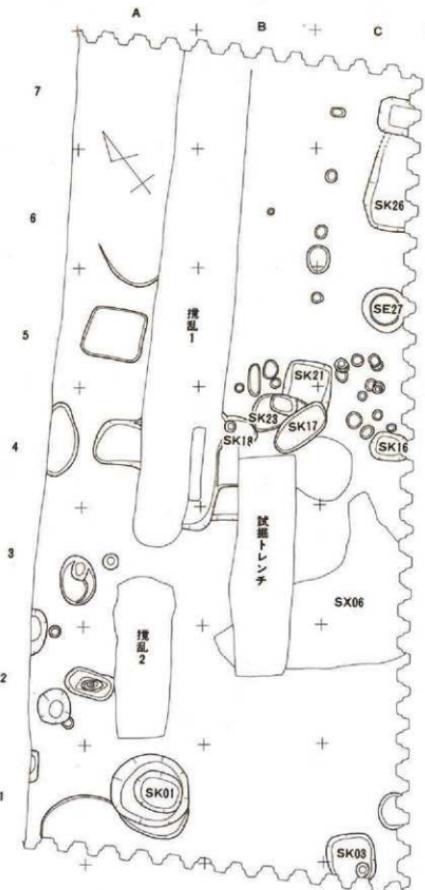
調査を重ね、現在までにその調査次数は70次を超え、膨大な数の資料が蓄積されている。「博多遺跡群」としてひとまとめに述べられがちであった、那珂川と御笠川（石童川）に挟まれた砂州上に立地する地域についても、調査が進むにつれて各時代、各地区ごとの性格が明らかになりつつある。特米、宋人百堂、日本最初の禅寺である聖福寺、承天寺の創建時の寺域、鎮西探題等の歴史的事象に対してさらに考古学的視点から新たな知見が得られることであろう。

また、国際貿易都市として栄えた中世以前の様相に

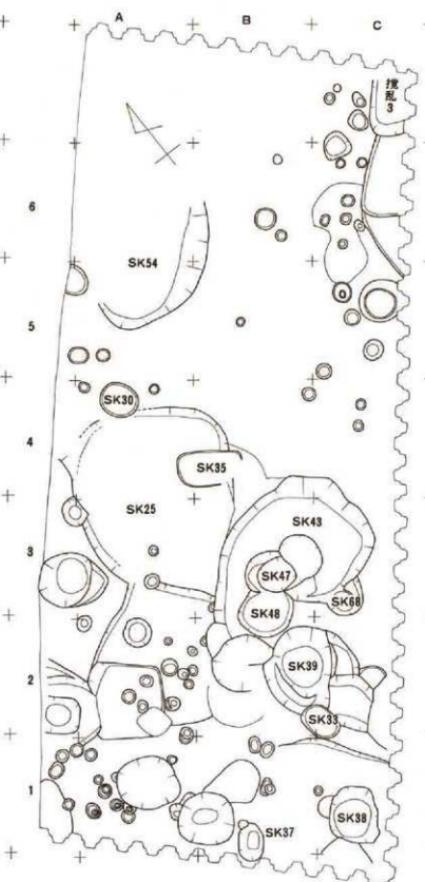


第1図 博多遺跡群発掘調査地域図

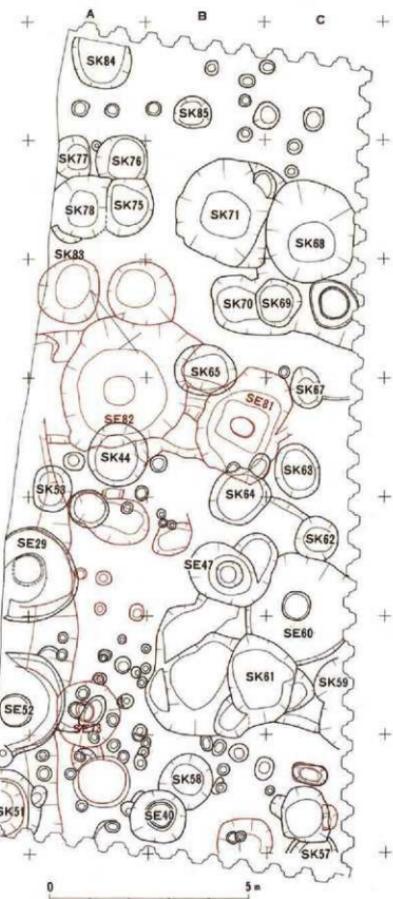
第I面



第II面



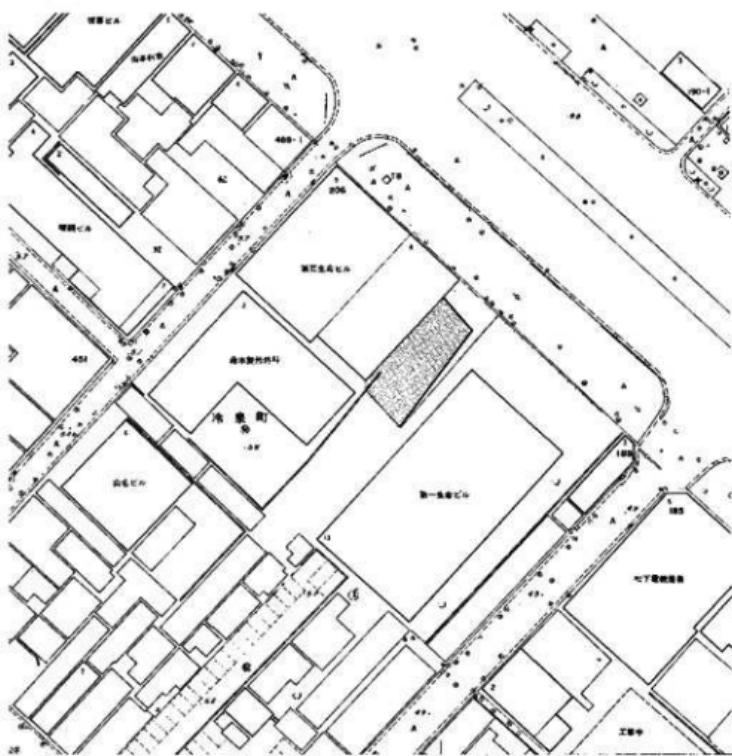
第III・IV面



0 5m

ついで、蓄積された資料を検討していくことによって、明らかになっていくだろう。

さて、今回報告する第44次調査区域は「博多遺跡群」の博多浜のほぼ中央部にあたる。当調査区域の南側約100mの第6次調査区域では、1980年に共同住宅建設に伴って発掘調査が行われており、これまで様相がよくとらえられていなかった11世紀代の輸入陶磁器の新資料が数多く発見されている。第6次調査区域、および第44次調査区域に隣接する22次調査区域では上部に井桁、下部に曲物の井戸枠をもつ8世紀代の井戸が検出されている。

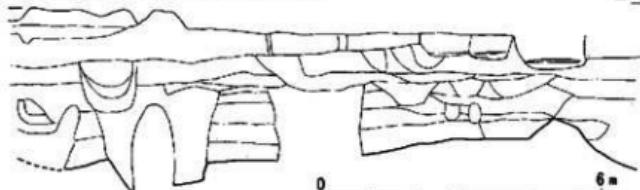


第3図 博多遺跡群44次調査地域周辺図

III 発掘調査の概要

調査は1989年2月1日より近現代の擾乱の掘取りから始まった。擾乱層の下面で確認された14世紀前半代の遺物包含層（黒褐色土）の上面から基盤の砂層まで4面の遺構面を設定した。第I面の14世紀前半代の包含層上面（標高3.8m～4.2m）では、19世紀代・14世紀後半～15世紀代の土壤、柱穴群、焼土・鉄滓の拉がりを検出した。第II面は12世紀前半代の包含層（灰褐色土）上面で標高3.3m前後とし、井戸1基、土壤、柱穴群を検出した。第III面は8世紀前半代～9世紀前半代の包含層（灰褐色砂）上面で標高3.0m前後とし、井戸5基、上塙36基、柱穴群を検出した。遺構が最も密に検出された面である。第IV面は基盤の砂層、標高は2.5m前後で、9世紀前半代の井戸と8世紀前半代の井戸が近接して検出された。調査区東北隅では弥生時代後期後半から終末にかけての落ち込みを検出した。

L=5.00m



第4図 博多遺跡群44次調査層位（北壁面）

IV 遺構と遺物

1 検出遺構

井戸

SE28(第5図、図版5) 第III面、調査区の西北で検出した。掘り方は上面径2.4mの略円形を呈し、深さは2.1mを測る。西北側は調査区外に延びる。基底部中央に上端径65cm、下端径85cm、深さ45cmの桶側が据えられていた。

SE40(第5図) 第III面、調査区の西側中央で検出した。掘り方は上面径1.7mの略円形を呈し、深さは2.1mを測る。桶側構造と考えられるが、井戸枠は残存していないかった。

SE47(第5図) 第II面、調査区の中央よりやや西側で検出した。掘り方は上面の長径2.0mの不整円形を呈し、深さは1.5mを測る。桶側構造と考えられるが、井戸枠は残存していないかった。

SE52(第6図、図版5) 第III面、調査区の西側で検出した。掘り方は上面径2.5mの円形を呈し、深さは2.0mを測る。西北側は調査区外に延びる。

SE60(第6図、図版6) 第III面、調査区の中央よりやや西側で検出した。掘り方は上面径

3.0mの略円形を呈し、深さは1.55mを測る。西北側は調査区外に延びる。西側をSK61、北側をSE47、東側はSK62に切られる。東南側は調査区外に延びる。井戸枠の痕跡は遺構が確認できたレベルと同じ高さで確認でき径75cmを測り、桶側の残欠とみられる木質が基底部より30cm残存していた。

SE73(第6図、図版7) 第III面、調査区の西南で検出した。掘り方は上面径1.6mの略円形を呈し、深さは1.4mを測る。西北側は調査区外に延びる。基底部中央に上端径45cm、下端径50cm、深さ40cmの桶側が据えられていた。

SE81(第7図、図版8) 第IV面、調査区のほぼ中央で検出した。掘り方は二段掘りで、上面の長径2.8mの不整円形を呈し、深さは1.7mを測る。構造は上部が方形縦板で、幅8cmの板材を80×100cmの方形に組み、その外側に縦板の基部が残存していた。四隅には支柱となる杭等はみられなかった。下部には径50~60cm、深さ50cmの曲物が据えられていた。

SE82(第7図、図版9) 第IV面、調査区のほぼ中央で検出した。掘り方は上面径3.2mの不整円形を呈し、深さは涌水のため完掘できなかつたが、2.0m以上を測る。基底部中央に径70cm、深さ70cm以上のくり抜きの井戸枠が据えられていた。井戸枠の外側上部に一回り大きな井戸枠の基部が残存しており、上部にさらに一段分くり抜きの井戸枠が重ねられていたとみられる。

土壤

SK35(第8図、図版10) 第II面、調査区のほぼ中央で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。全長1.6m、幅88cm、深さ8~14cmを測る。上部器小皿・杯が底面より5cm浮いた状態で出土した。方位はN-37°-Wにとる。

SK37(第8図、図版10) 第II面、調査区の南側中央で検出した。平面形は楕円形を呈する。全長94cm、幅62cm、深さ25cmを測る。埋土には炭化物、骨片を含み、土器、陶磁器が底面より10cm浮いた状態で出土した。方位はN-37°-Eにとる。

SK38(第9図、図版11) 第II面、調査区の西南隅で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。全長1.4m、幅1.2m、深さ1.2mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

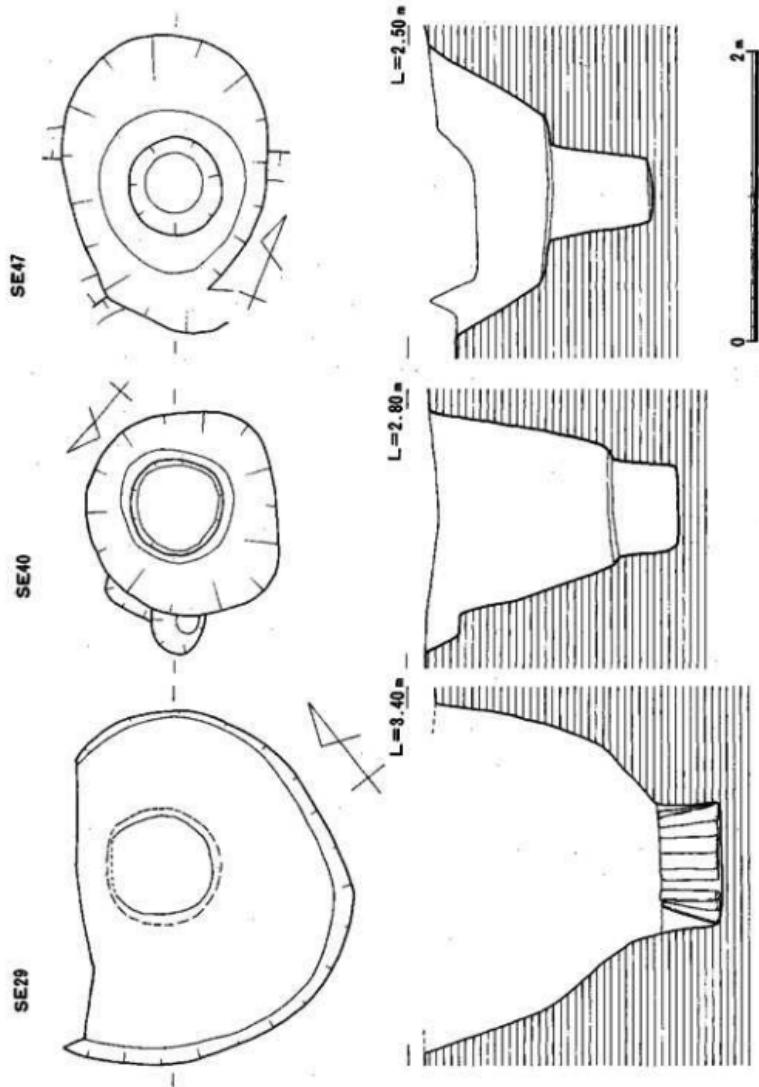
SK58(第9図、図版12) 第III面、調査区の西側のやや中央寄りで検出した。平面形はほぼ円形を呈し、西側をSE40に切られる。径1.1~1.2m、深さ86cmを測り、壁はやや斜めに立ち上がる。

SK61(第9図) 第III面、調査区の西側のやや南寄りで検出した。平面形は不整形を呈する。全長2.3m、幅1.8m、深さ90cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。

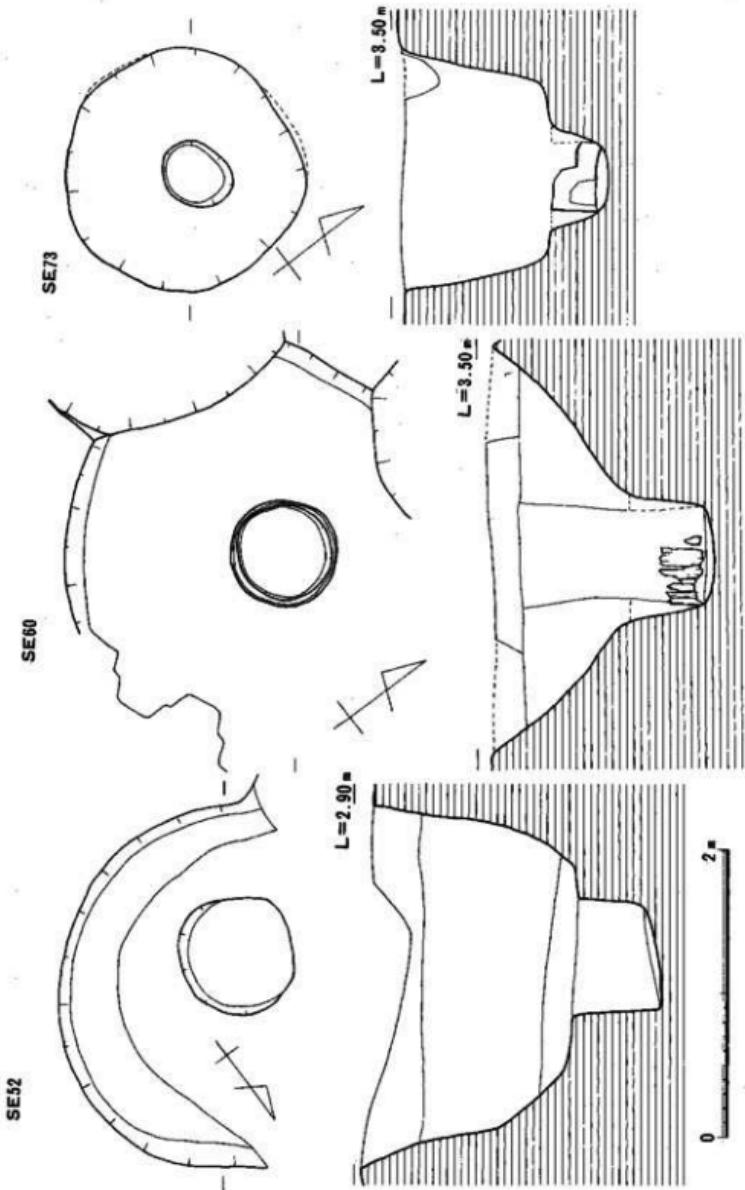
SK64(第9図) 第III面、調査区の中央部南寄りで検出した。平面形は不整円形を呈する。全長1.3m、幅1.2m、深さ40~60cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。

SK65(第10図) 第III面、調査区のほぼ中央部で検出した。平面形は不整楕円形を呈する。全長1.6m、幅1.2m、深さ70cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

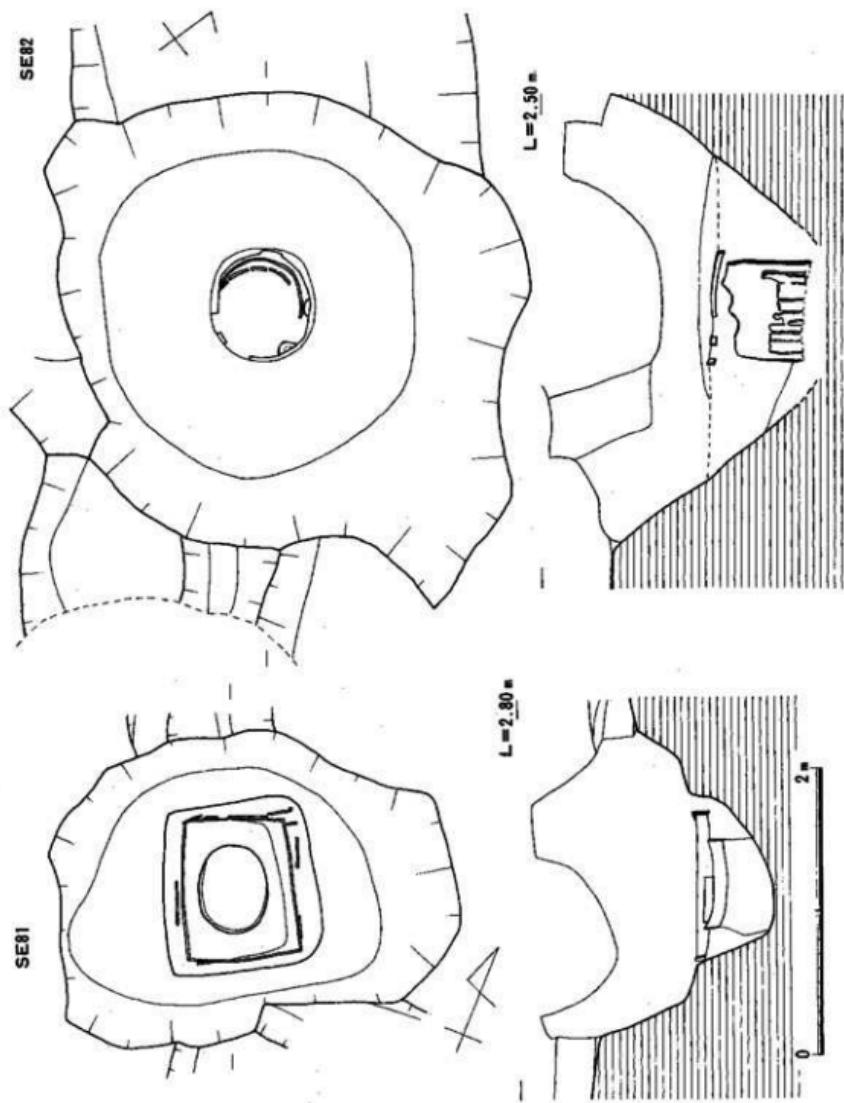
第5図 井戸実測図 (I)



第6図 井戸実測図 (2)



第7図 井戸実測図 (3)



SK67 (第10図) 第III面、調査区の中央部のやや南東寄りで検出した。平面形は不整橢円形を呈する。全長1.0m、幅80cm、深さ80cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

SK68 (第10図) 第III面、調査区の東側の南寄りで検出した。平面形は不整円形を呈する。径2.2~2.6m、深さ80cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。井戸の掘り方の可能性がある。

SK69 (第10図) 第III面、調査区のはば中央部で検出した。平面形は不整円形を呈する。径1.1~1.2m、深さ40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

SK71 (第11図) 第III面、調査区の東側の中央部で検出した。平面形は不整円形を呈する。径2.1~2.6m、深さ1.1mを測る。壁は斜めに立ち上がる。井戸の掘り方の可能性がある。

SK75 (第11図) 第III面、調査区の東側の北寄りで検出した。平面形は不整橢円形を呈する。全長1.4m、幅1.2m、深さ1.0mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。SK76・78を切る。

SK76 (第11図) 第III面、調査区の東側の北寄りで検出した。平面形は不整円形を呈する。径1.1~1.3m、深さ68cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。SK75・78に切られる。

SK84 (第11図) 第III面、調査区の東北隅で検出した。北東部は調査区外に延びる。平面形は不整円形を呈し、径1.2~1.5m、深さ1.1mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

2 出土遺物

SE28出土遺物 (第12図、図版11)

土師器小皿 (1・2) 底部の切離しは1がヘラ切りで、2は糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。2は口径に対する底径の比率が低い稀な型である。

白磁 梗 (3~5) 3はIV類、4は口縁端部を平坦にするV類で外底に「十」の墨書がある。5はII類の底部片で、外底に判読できない墨書がある。

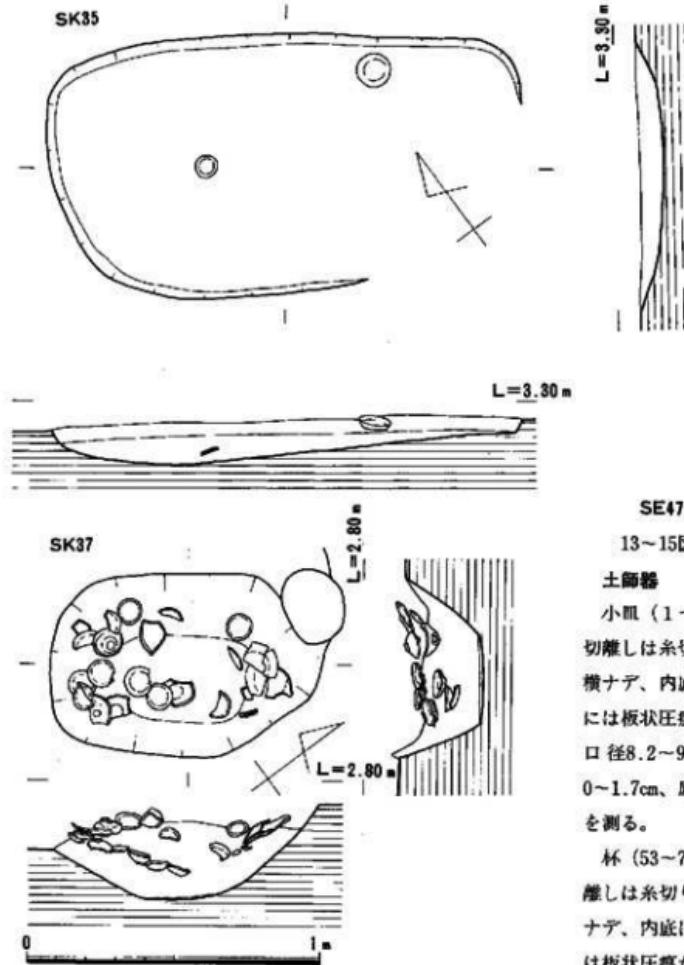
青磁 梗 (6・7) 6はヘラ、櫛状の工具を使って体部外面に蓮弁、内面に蕉葉文を施す龍泉窯系のやや小振りの梗で、体部外面下位は露胎である。7はヘラ状の工具を使って体部外面に条線を施し、口縁下内面に沈線をめぐらす。

SE40出土遺物 (第12図、図版11)

土師器丸底杯 (8) 内面を磨いて器面を平滑にし、口縁下にこてあて痕が放射状にみられる。外底部にはヘラ切り痕、板状圧痕が残る。

白磁 梗 (9~10) 口縁部が軽く外反するV類の梗で、内底見込みに段がつく。

須恵器 瓢 (11) 体部外面には格子目状の叩きがみられ、内面は当具痕をナデ消す。胎土には1mm前後の白色砂粒を含み、硬質に焼成され、青灰色を呈する。



第8図 土壌実測図 (I)

5~3.1cm、底径9.0~10.1cmをはかる。

青磁 梗 (78) 体部外面に蓮弁を削り出す龍泉窯系の小振りの梗である。

SE52出土遺物 (第15図、図版15)

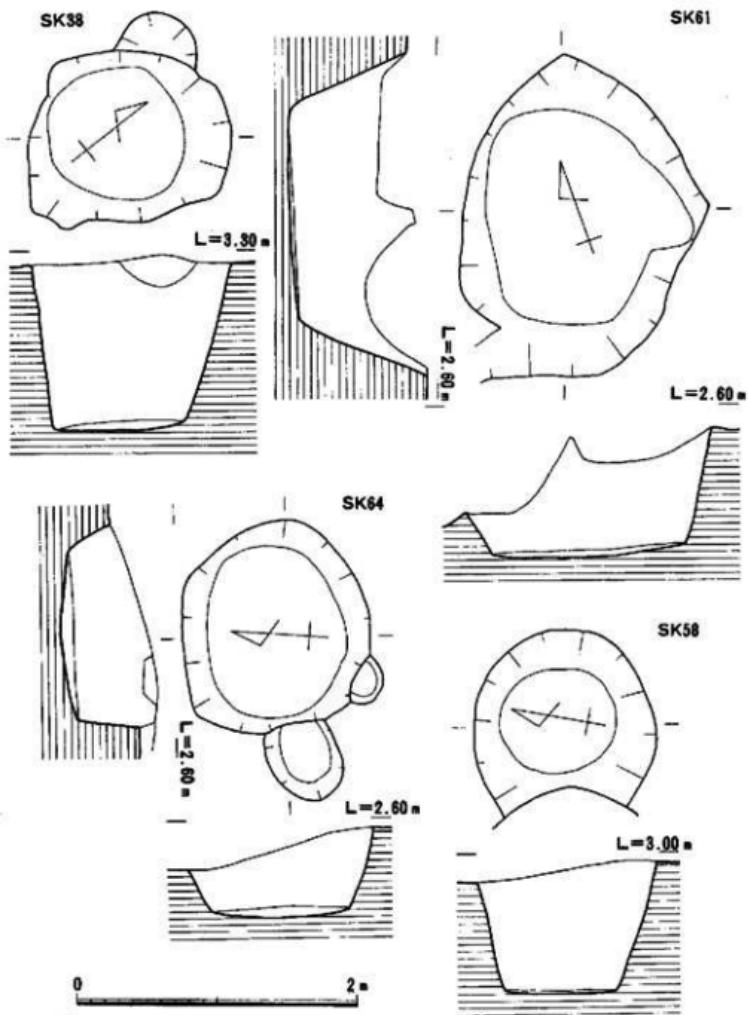
土師器 小皿 (1) 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.4cm、器高1.0cm、底径7.0cmを測る。

SE47出土遺物 (第
13~15図、図版12~14)

土師器

小皿 (1~52) 底部の
切離しは糸切りで、体部は
横ナデ、内底はナデ、外底
には板状圧痕がみられる。
口径8.2~9.3cm、器高1.
0~1.7cm、底径6.0~7.5cm
を測る。

杯 (53~77) 底部の切
離しは糸切りで、体部は横
ナデ、内底はナデ、外底に
は板状圧痕がみられる。口
径13.3~14.1cm、器高2.



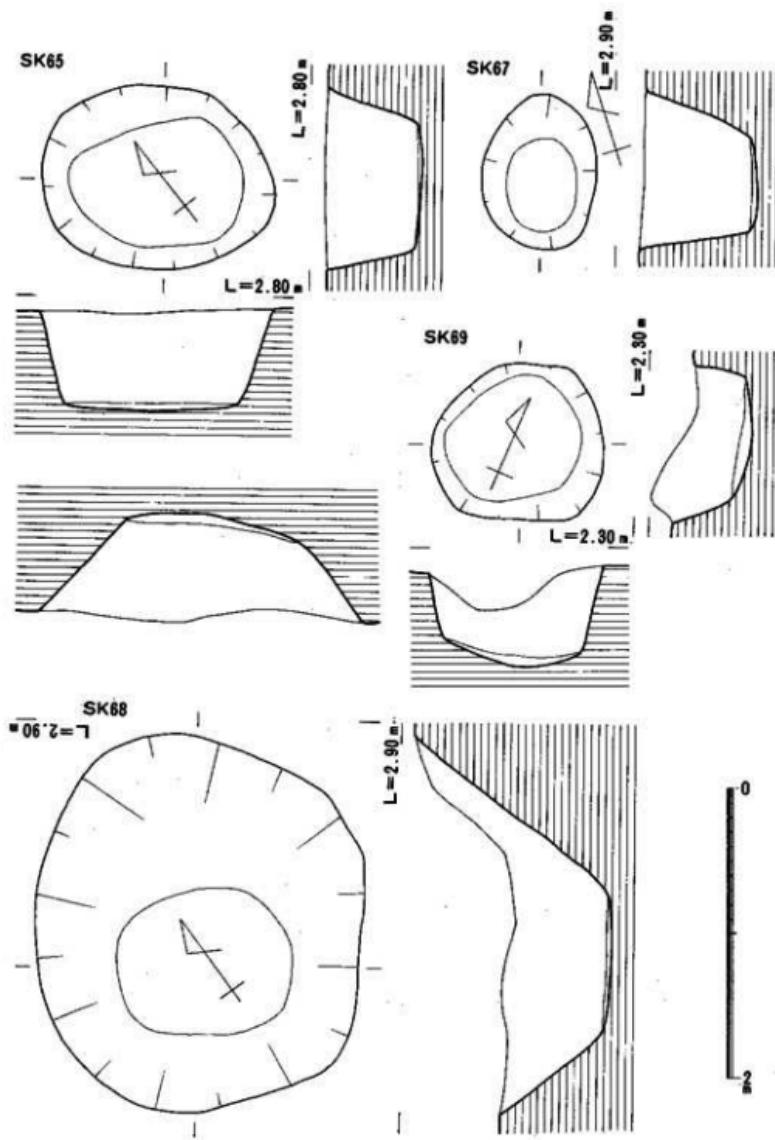
第9図 土壌実測図 (2)

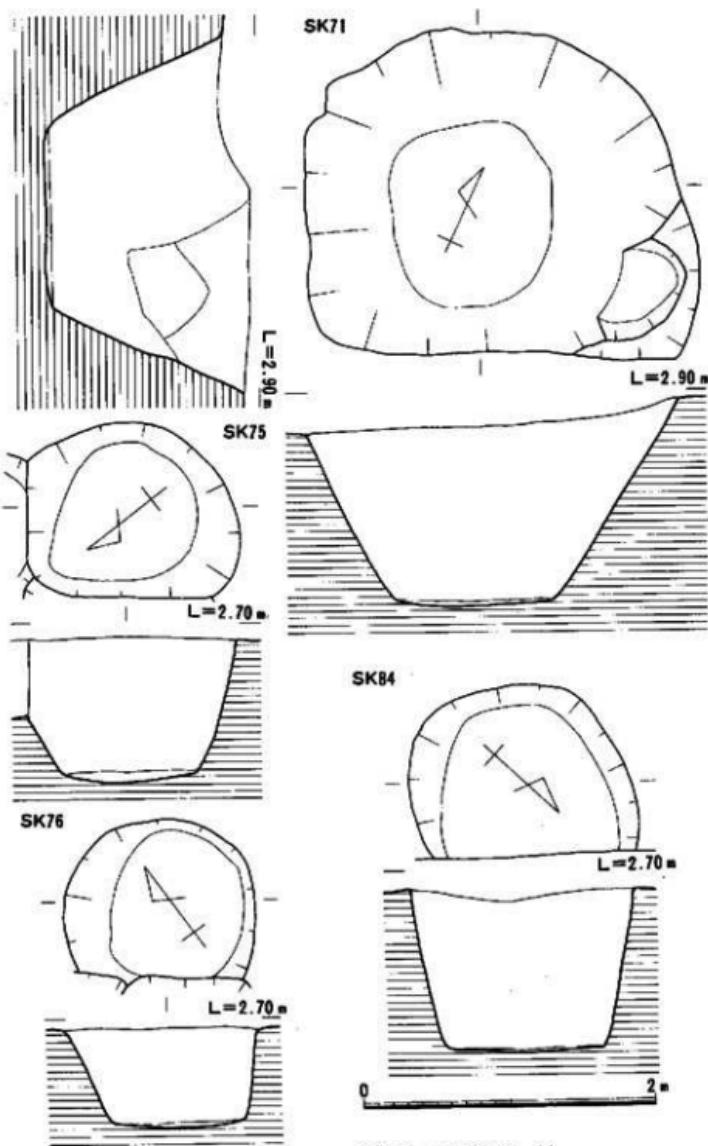
白磁

椀 (2) 外反する口縁部を輪花にするV類の椀である。

皿 (3・4) 口縁部が内湾する平底の皿である。

第10圖 土壤測量圖 (3)





第11図 土壌実測図 (4)

黒釉陶器（5） 口縁部が外反する天目模で、胎土は白色砂粒を含み灰色、釉は黒褐色を呈する。

SE80出土遺物（第15図、図版15）

土師器 小皿（6・7） 底部の切離しは1がヘラ切りで、2は糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

白磁 梵（8・9） 8の口縁部は直線的に外上方に延び、内底見込みは輪状に削り取る。

9は口縁下で内湾して開く。外底に判読出来ない墨書きがある。

SE81出土土器（第16図、図版15・16）

須恵器

杯蓋（1・2） いずれも天井部外面は回転ヘラケズリ、口縁端部をおりかえす。1は扁平なボタン状のつまみがつく。天井部内面がナデ、体部・口縁部は横ナデである。

杯身（3～5） 3・4は底部と体部の境に稜がつき、断面四角形の高台が底端部よりやや内側につく。5は無高台の杯である。

土師器 瓢（6） 上半部がやすぼまる丸型の胴部から、ゆるく外反する口縁部がのび、口縁部内面の稜は不明瞭である。口縁部横ナデ、胴部外面上半ハケメ、下半ヘラナデ、内面はナデ。

SE82出土遺物（第16図、図版16） 他に越州窯系青磁、緑釉陶器の細片が出土。図版参照。

土器類

杯（7・8） 底部は平たくヘラ切りされ、大きく開く体部は横ナデ、内底はナデ。

碗（9） 内底はナデ、体部外面下半は回転ヘラケズリ、撥形に開く高台より内側は横ナデ。

内黒土器 碗（10） 内底はヘラミガキ、高台より内側は横ナデの底部片である。

白磁 梵（11） 口縁端部を折り曲げて玉縁状にする耶州窯系のもので、やや黄色味を帯びる。

須恵器

杯蓋（12） 口縁端部に見受けのかえりをもつ

杯身（13） 底部と体部の境の稜線がやや上位にあり、断面四角の高台が底端部の内側につく。

SK35出土土器（第17図、図版17）

土師器

小皿（1） 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径7.5cm、器高1.0cm、底径6.1cmを測る。

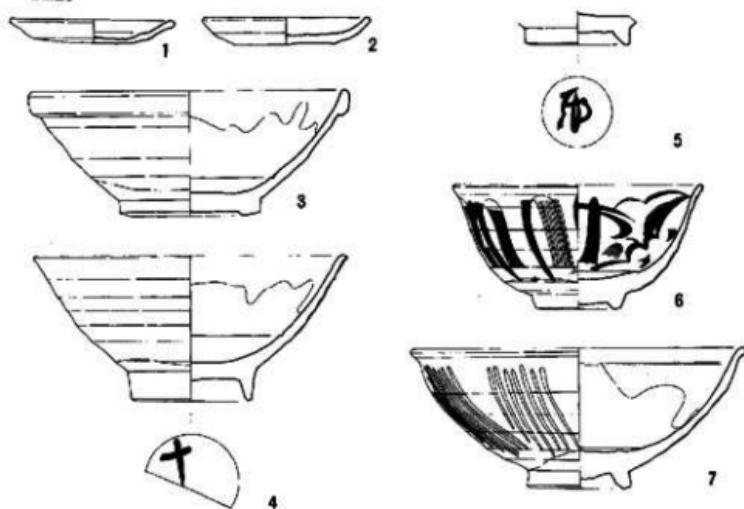
杯（2） 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径11.8cm、器高2.4cm、底径8.7cmを測る。

SK37出土遺物（第17図、図版17）

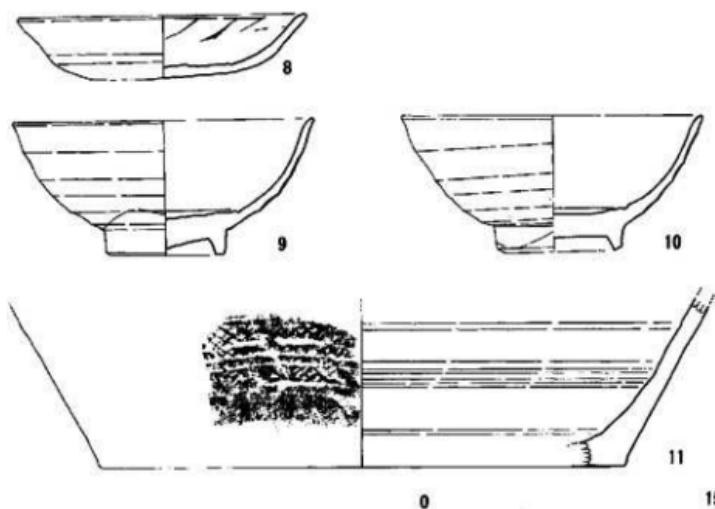
土師器

小皿（3～11） 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.2～9.9cm、器高1.0～1.6cm、底径6.3～7.8cmを測る。

SE29



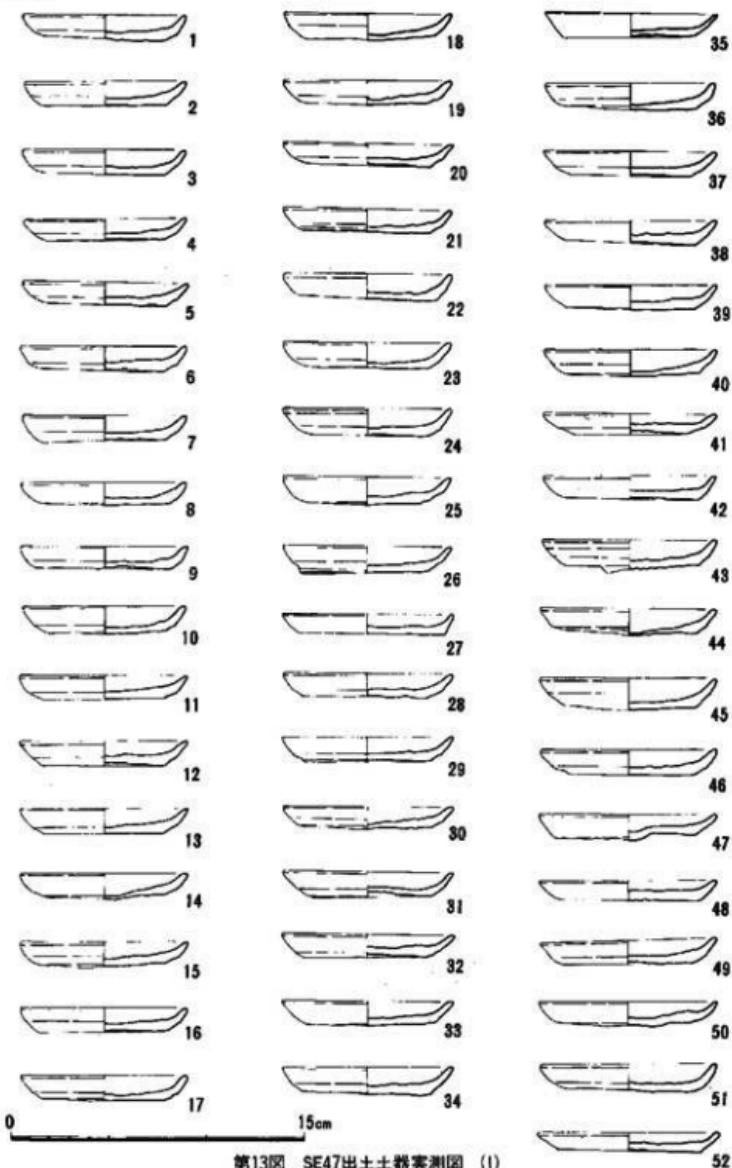
SE40



0 15cm

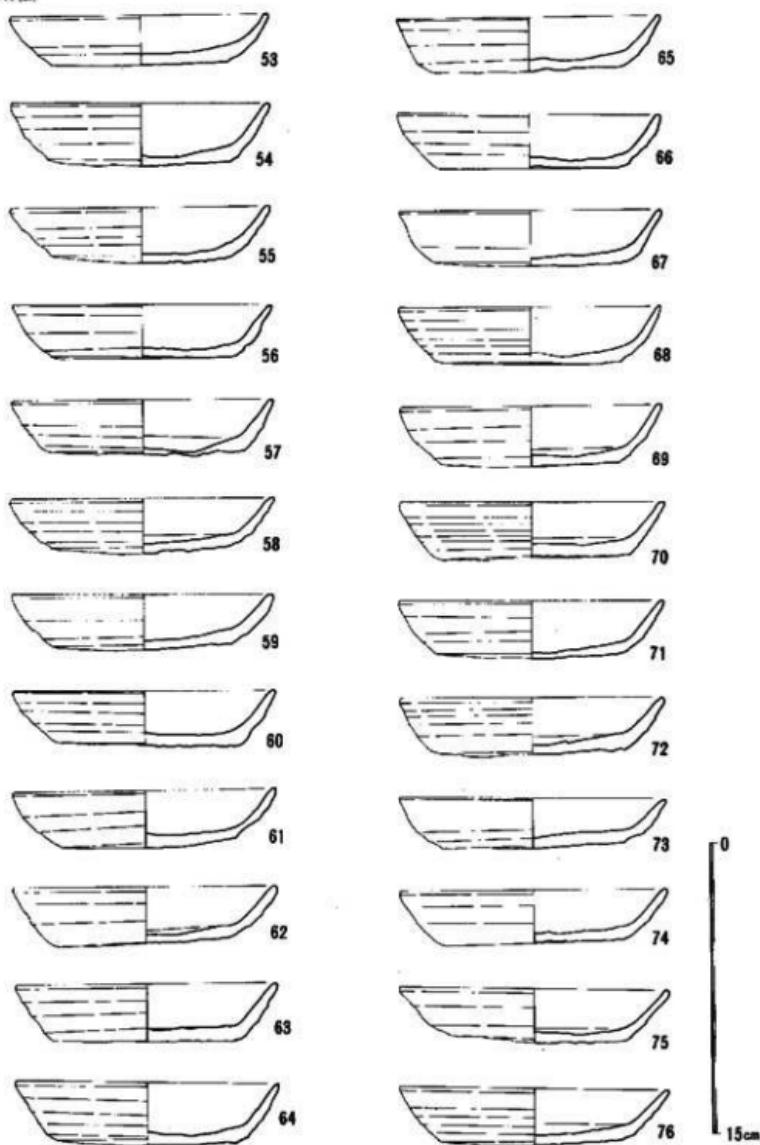
第12図 SE29・40出土遺物実測図

SE47(1)

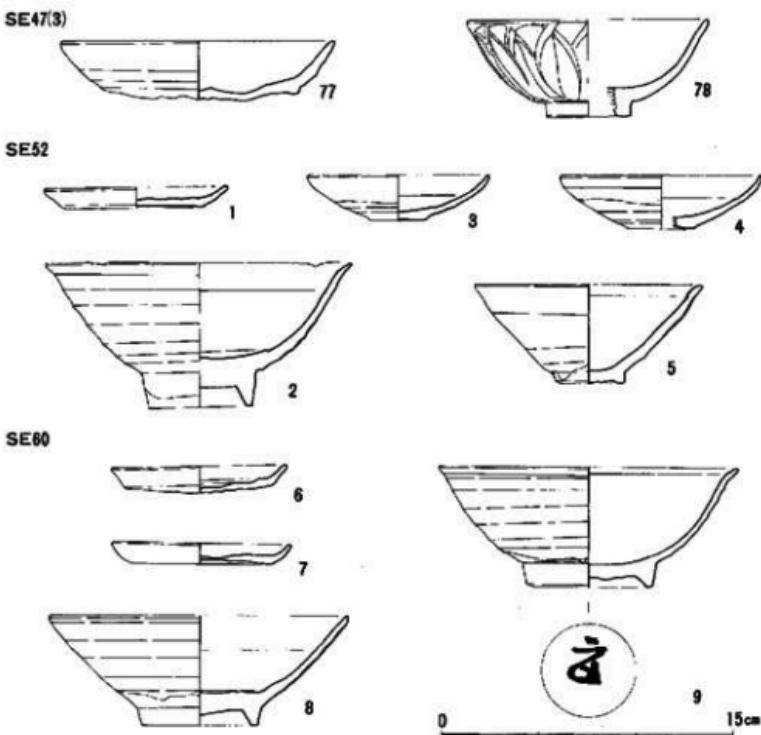


第13図 SE47出土土器実測図 (I)

SE47(2)



第14図 SE47出土土器実測図 (2)



第15図 SE47・52・60出土遺物実測図

杯 (12~14) 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。口径9.2~9.9cm、器高1.0~1.6cm、底径6.3~7.8cmを測る。

瓦器 小皿 (15) 底部の切離しはヘラ切りで、体部外面は横ナデ、内面はヘラ磨きされる。

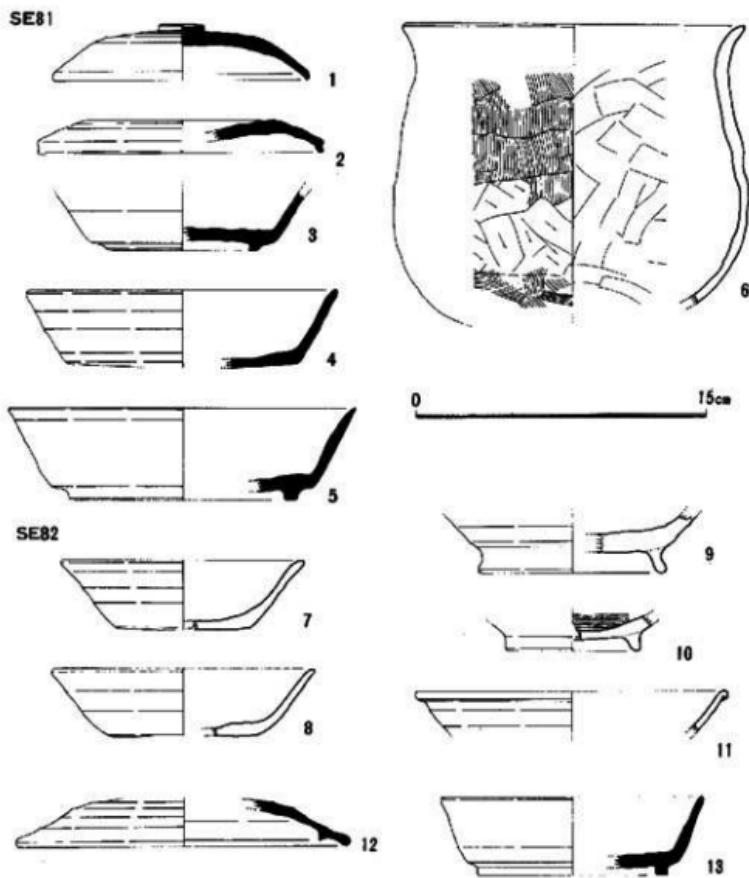
白磁 盆 (16~26) 16~19は口縁部が内湾する、20から22は口縁部が外反する平底の皿である。23・24は口縁部が外反し端部は斜めに切られ、体部内面を白堆線で区割りする。24は体部に丸みを持ち口縁端部は平坦にし、体部内面を白堆線で区割りする。底部は上げ底で、23・24と同じく全面施釉後削られている。25・26は口縁部が内湾する平底の皿である。

黒釉陶器 (27) 口縁部が外反する天目模で、胎土は白色砂粒を含み灰色、釉は墨褐色を呈する。

SK38出土遺物 (第18図、図版18)

土師器

小皿 (1~4) 底部の切離しは1・2がヘラ切りで、3・4は糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。口径9.5~10.6cm、器高1.2~1.7cm、底径6.6~8.4cmを測る。1は口径が小さく、器壁が厚い特異な型である。



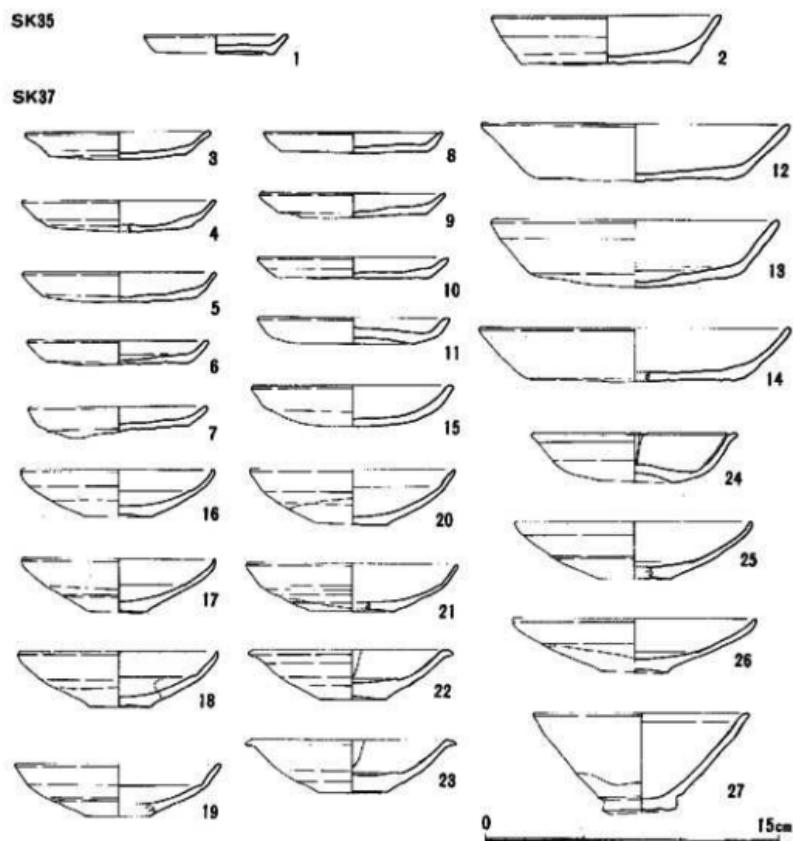
第16図 SE81・82出土遺物実測図

杯（5～6） 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径15.3～15.6cm、器高2.8～2.9cm、底径10.6～11.2cmを測る。

丸底杯（7～13） 内面を磨いて器面を平滑にし、口縁下にこてあて痕が放射状にみられる。外底部にはヘラ切り痕、板状圧痕が残る。薄手で口縁下内面に稜がつく7～10と厚手の11～13とにタイプ分けできる。

白磁

椀（14・15） 14は口縁端部を平坦にするV類、15はII類の大椀である。



第17図 SK35・37出土遺物実測図

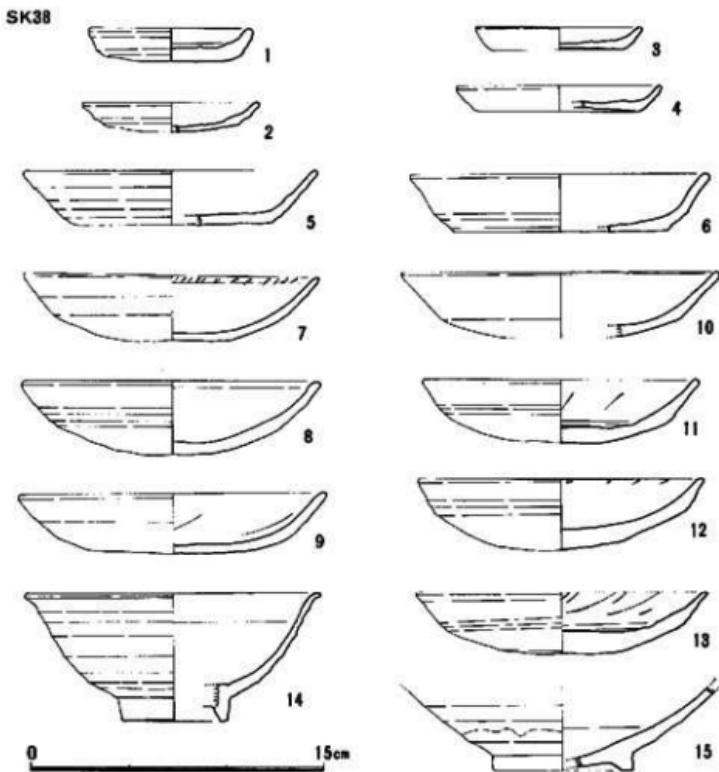
SK41出土遺物（第19図、図版19）

土師器

小皿（1～7） 底部の切離しは1～4がヘラ切りで、5～7は糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.7～9.6cm、器高1.0～1.4cm、底径6.2～8.7cmを測る。

杯（8～11） 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.7～9.4cm、器高1.0～1.4cm、底径6.2～7.8cmを測る。

丸底杯（12～15） 内面を磨いて器面を平滑にし、口縁下にこてあて痕が放射状にみられる。



第18図 SK38出土遺物実測図

外底部にはヘラ切り痕、板状圧痕が残る。

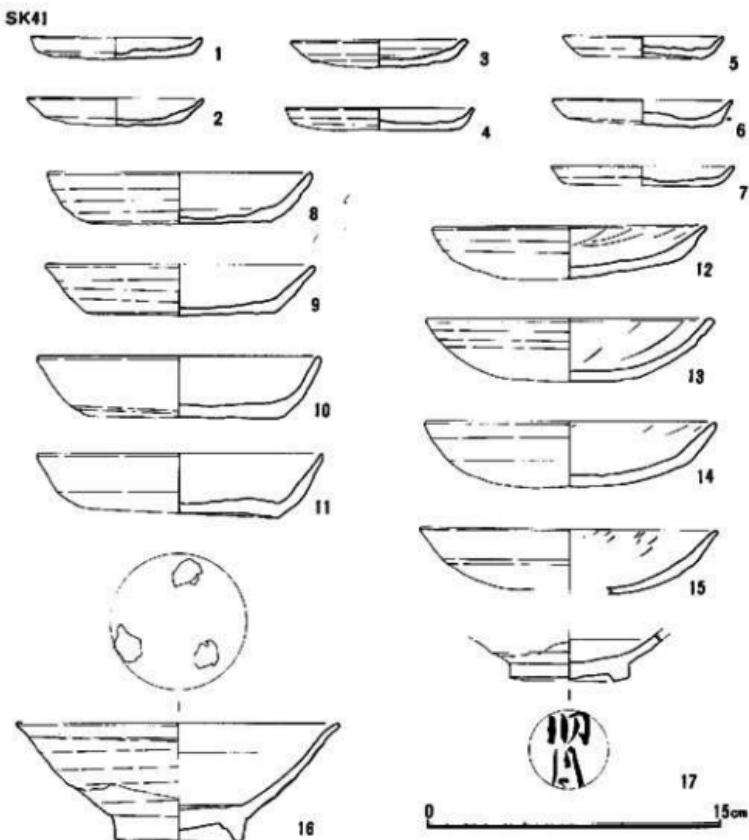
白磁 梗 (16~17) 16の口縁部は直線的に外上方に延び、内底見込み、外底に目アトがみられる。17はIV類の底部片で、外底に「綱口」の墨書きがある。

SK38出土遺物 (第20図、図版20)

内黒土器 鉢 (1) 体部は丸みをもち、口縁部が外反する。体部は内外面ともにヘラ磨きされる。

黒色土器 梗 (2) 体部は丸みをもち、口縁端部は水平に引き出される。体部外面は横ナデ、内面はヘラ磨きされる。

青磁 梗 (3) 平坦な内底見込みに、輪状高台の越州窯系青磁梗である。外底に目アトがみられる。胎土は灰色で堅緻、オリーブ色の釉が全面にかかる。



第19図 SK41出土遺物実測図

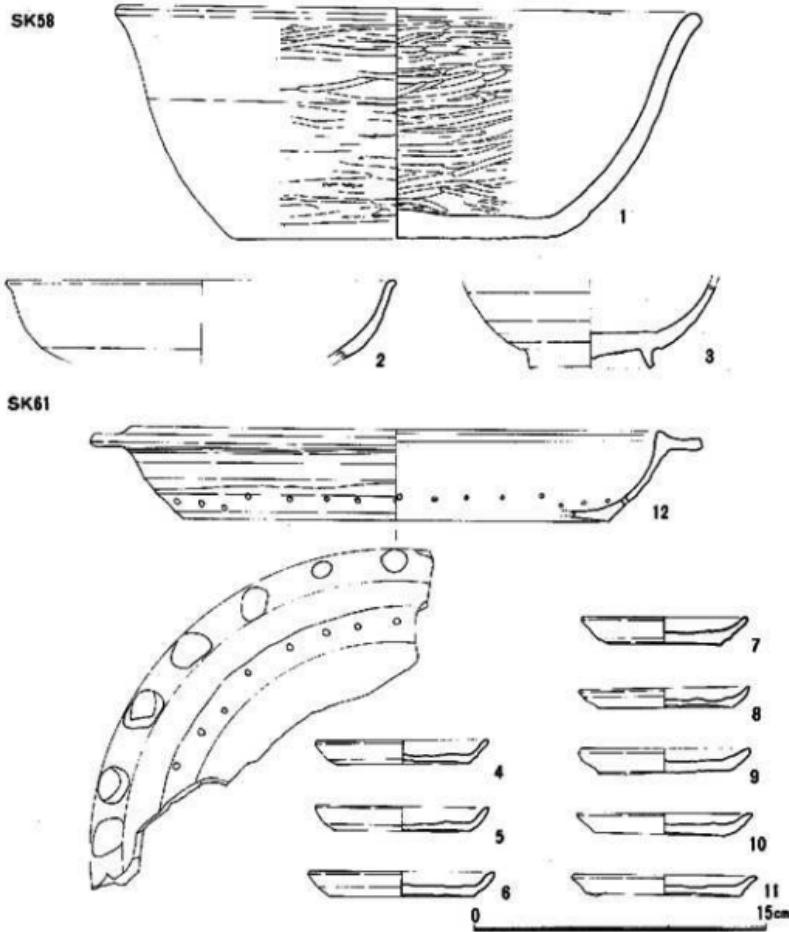
SK61出土遺物 (第20図、図版20)

土器器 小皿 (4~11) 底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.9~9.6cm、器高1.0~1.4cm、底径6.6~7.4cmを測る。

陶器 盤 (12) 体部の底部との境付近に外側から穿孔され、外面は口縁下からヘラケズリされ、下半から底部にかけて淡灰褐色の釉がかけられ、粗砂粒を多量に含む灰色の胎土。蓋か。

SK84出土遺物 (第21図、図版21)

白磁 梗 (1~3) 1は内底見込みに沈圓線がないIV類、2は口縁部が軽く外反するV類の梗で、内底見込みに段がつく。3は口径に比して器高、高台が高く、口縁端部を先細りに外



第20図 SK58・61出土遺物実測図

反する。

青磁 梗（4） 内面に型押しの文様をもつ小振りの梗で、胎土は黒色微粒子を含み灰色を呈する。オリーブ色の釉が全面にかかる。外底に日アトがみられる。

SK65出土遺物（第21図、図版21・22）

土師器 丸底杯（5） 内面を磨いて器面を平滑にし、外底部にはヘラ切り痕、板状圧痕が残る。

瓦器 梗 (6・7) 体部は丸みをもち、口縁部は直線的に外上方へ延びる。体部外面は横方向、内面は一方向にヘラ磨きされる。内面から口縁部外面にかけて灰黒色、体部外面下半は灰色で焼成されている。7の体部外面下半には、粘土紐の縫ぎ目、指頭圧痕がみられる。

白磁

梗 (8~11) 8~10はIV類、11の高台は高くなく、体部は丸味をもち、口縁下で内湾し外に開く。

皿 (12~15) 12・13は口縁部が内湾する、14から15は口縁部が外反する平底の皿である。

四耳壺 (16) 口縁・底部を欠失している。体部に縦方向の条線を入れ、七分割している。胎土は灰白色、釉は黄みを帯びた灰白色で、皿 (12~15) と同じ特徴をもつ。

青白磁

梗 (17) 体部は丸みをもち、口縁部は端部を細くおさめ、直線的に僅かに開く。

皿 (18) 外反する口縁部を輪花にする平底の皿である。

陶器 盆 (19) 口縁部を玉縁状にし、胎土は砂粒を多量に含み灰色、オリーブ灰色の不透明な釉が内面から口縁部外面にかけてかけられ、端部で拭き取り重ね焼きをしている。化粧土は体部外面上半までかけられている。

SK67出土遺物 (第22図、図版22)

研磨土器 梗 (20・21) いずれも淡黄褐色を呈し、20は口縁部外面を強くナデ、内面、体部外面をヘラ磨きする。21は深めで、口縁部は直線的に開く、器表の磨滅が著しいが、内面、体部外面はヘラ磨きとみられる。

白磁 高台付皿 (22) 口縁下内面に沈線をめぐらし、端部を平坦にする。

陶器 楊鉢 (23) 胎土には白色の粗い砂粒を含み、赤褐色を呈する。

SK68出土遺物 (第23図、図版23)

土師器

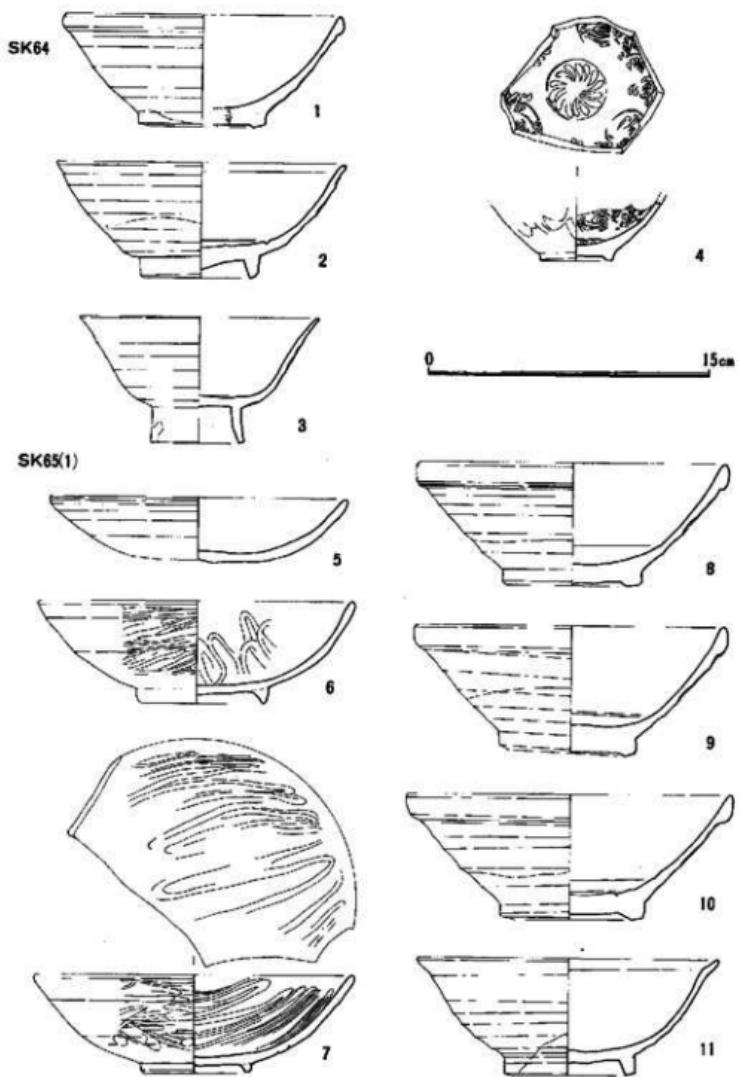
小皿 (1~4) 底部の切離しはヘラ切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径8.9~10.0cm、器高1.2~1.7cm、底径6.6~7.5cmを測る。

九底杯 (5・6) 内面を磨いて器面を平滑にし、口縁下にこてあて痕が放射状にみられる。外底部にはヘラ切り痕、板状圧痕が残る。

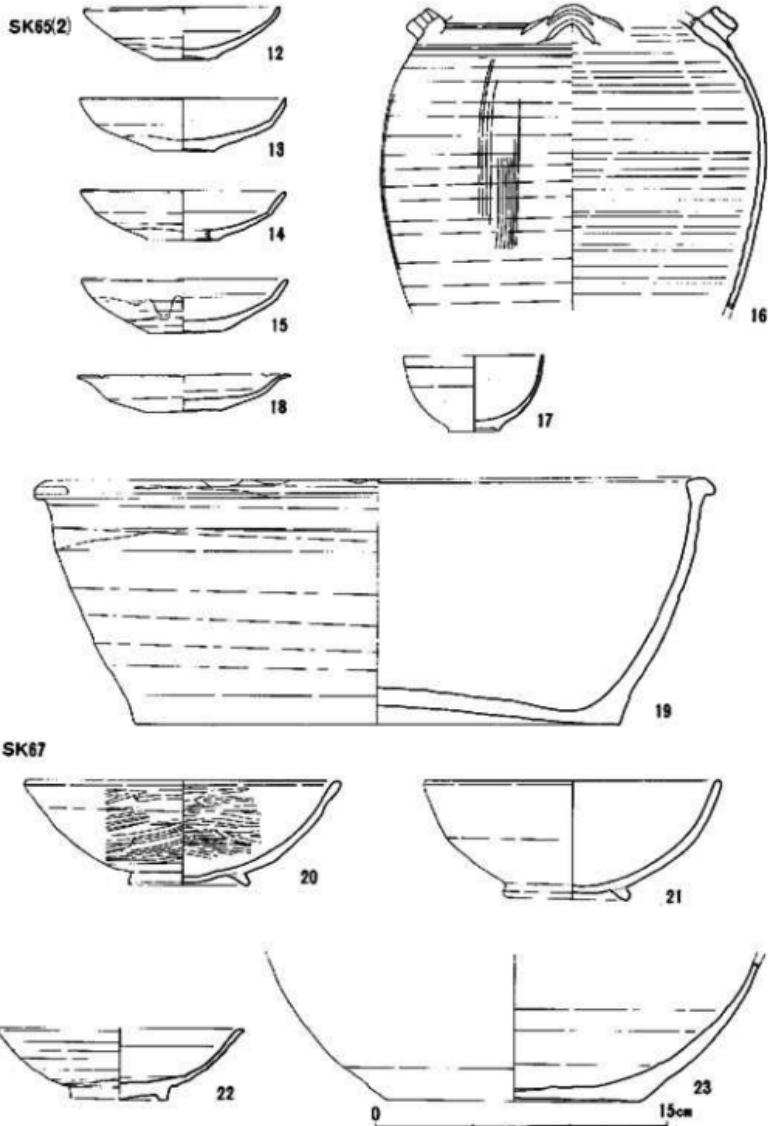
研磨土器 梗 (7) 浅めの体部に、太めの高台がつく。内面、体部外面をヘラ磨きする。淡黄褐色を呈する。

白磁

梗 (8~14) 8は細い玉縁状口縁にするII類、9は内底見込みに沈圓線がないIV類、10~13は沈圓線があるV類、14は内底見込みに段がつく小梗で、外底に「□縄」の墨書がある。

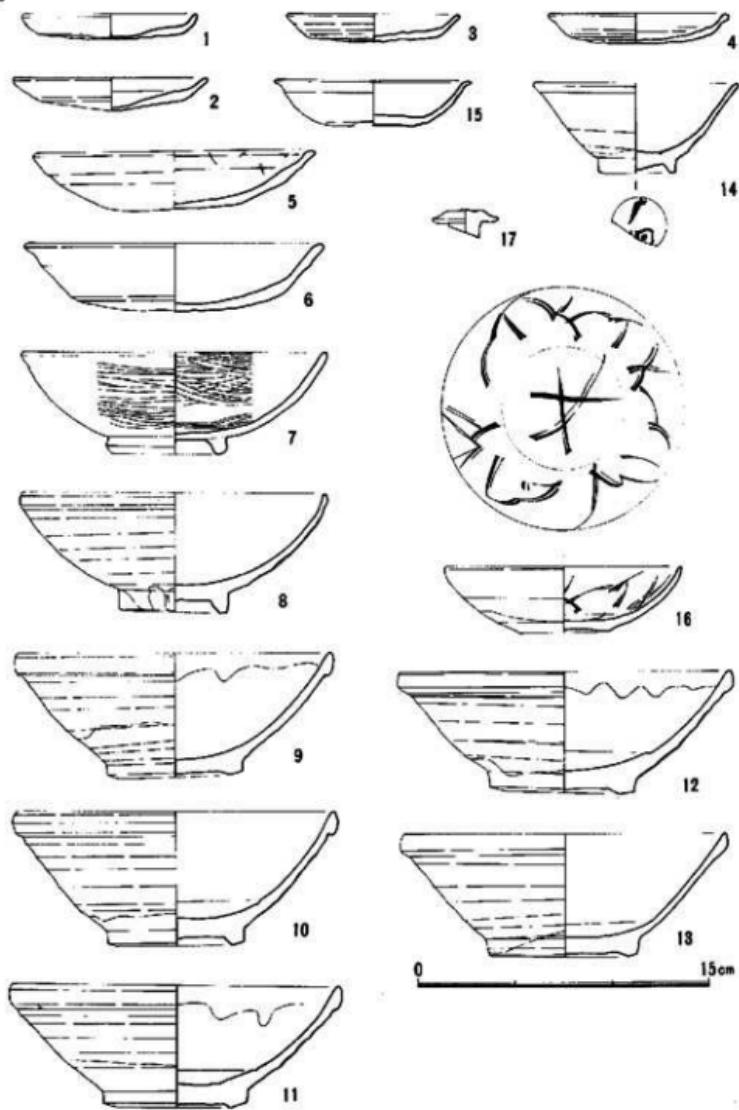


第21図 SK64・65(1)出土遺物実測図



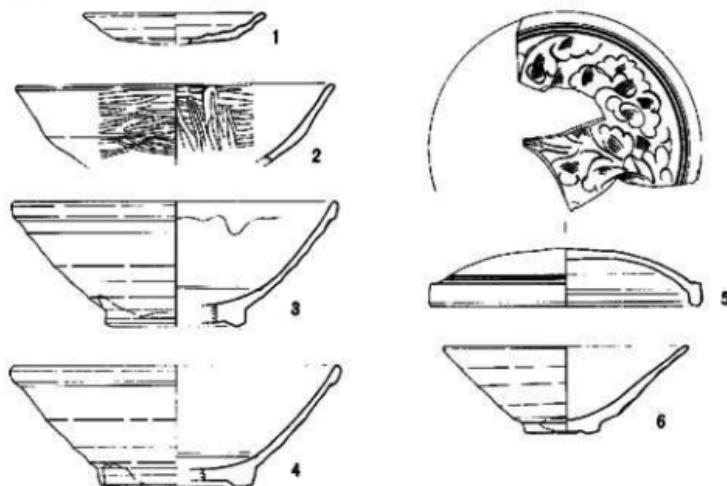
第22図 SK65(2)・67出土遺物実測図

SK68

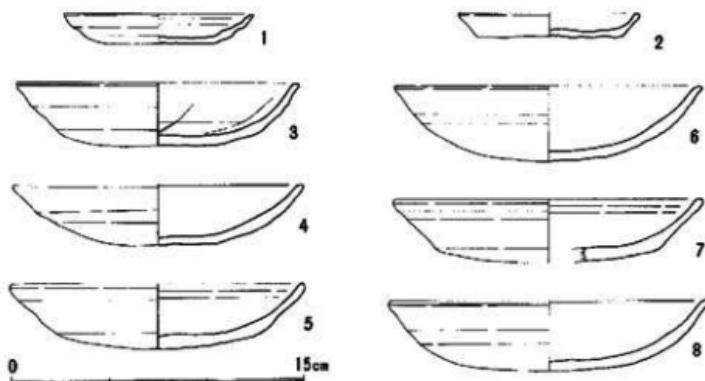


第23図 SK68出土遺物実測図

SK69



SK70



第24図 SK69・70出土遺物実測図

皿（15・16） 15は体部に丸みを持ち口縁端部を平坦にする上げ底の皿である。16は内面に蕉葉文が片切彫りされる平底の皿で、胎土は灰白色、釉は黄みを帯びる。

蓋（17） 小壺の蓋で、胎土は灰白色、釉は黄みを帯びる。

SK69出土遺物（第24図、図版24）

土師器 小皿（1） 底部の切離しはヘラ切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板

状压痕がみられる。口径9.4cm、器高1.6cm、底径6.1cmを測る。

瓦器 梗 (2) 体部中位に肥厚する屈曲をもつ押し出し技法による梗で、内外面ともヘラ磨きする。色調は灰色を基調とし、内面から口縁部外面にかけて藍色、銀色の光沢を呈する部分がみられる。

白壁

例(3・4) 内底見込みに沈黙線を有するIV類である。

蓋(5) 天井部に線刻文を施す平型の合子の蓋で、胎土は灰白色、釉は淡く緑みを帯び、水裂がある。

黒釉陶器 楠 (6) 平茶碗型の天目楕で、胎土は淡橙色、釉は青みを帯びた漆黒色で、釉が薄くなる口唇部、露胎部との境付近は褐色を呈する。口縁下内外面に糸目がみられる。

SK70出土遺物（第24図、図版24）

十一

小皿（1・2） 底部の切離しは1がヘラ切りで、2は糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。1は口縁部がゆるやかなN字形を呈する特異な型である。

九底杯（3～8） 内面を磨いて器面を平滑にし、口縁下にこててあて痕が放射状にみられる。外底部にはヘラ切り痕、板状压痕が残る。4・6・8の口縁端部内面には沙継がつく。

SK71出土遺物（第25図 図版25）

大師選

小皿（1-6） 底部の切離しはヘラ切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。口径 9.2-9.9mm、器高 1.3-1.9mm、底径 2.7-4.1mm を測る。

左座標 (7-8) 内側を磨いて器頭を平坦にし、外底部にはへら切り窓、板状压値が残る。

瓦器 梶 (9) 口縁端部が丸く、肥厚する。内面、体部外面をヘラ磨きする。内面から口縁部外面にかけて底黒色、体部外面は灰褐色を呈する。

SK32出土遺物（第25～26圖 圖版25～26）

七 梅雨

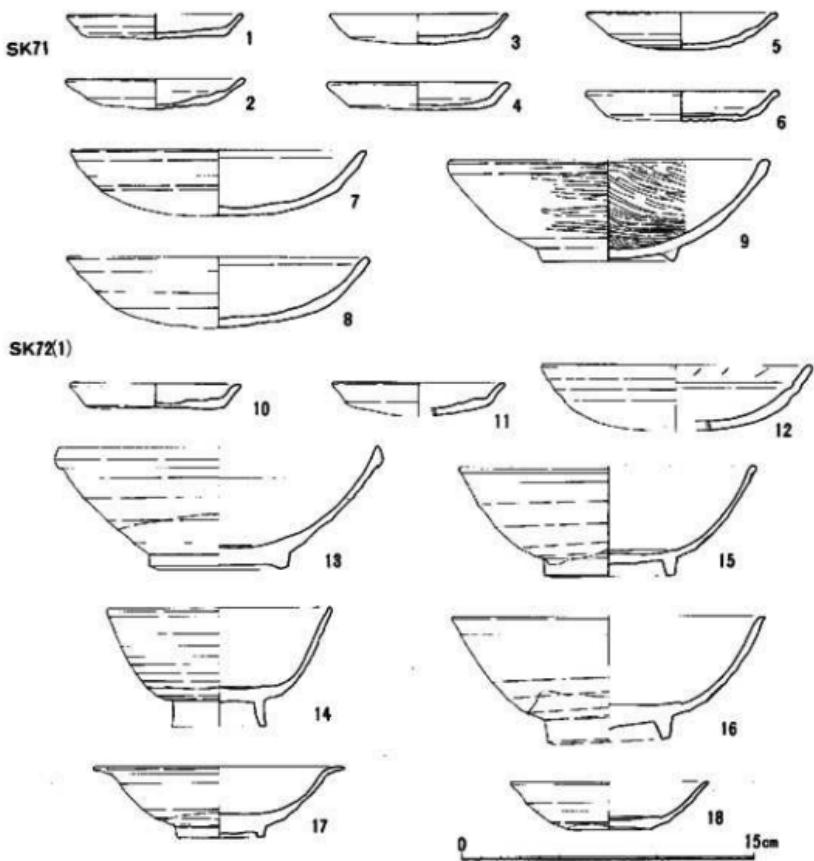
小皿 (10・11) 底部の切離しはヘラ切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状疣がみられる。口径8.9-9.0cm、高さ1.2-1.7cm、底径7.0-7.5cmを測る。

丸底杯(12) 内面を磨いて器面を平滑にし、口縁下にこてあて痕が放射状にみられる。外底部には△彫切り痕、板熱圧痕がある。

白甜

概 (13~16) 13は内底見込みに沈縁線がないIV類、14は腰が張り気味で口縁部は直線的に外上方に開く。15・16は口縁部が強く外に向るV類の端で、内底見込みに段がつく。

高台付図 (12) 口縁下で水平に内曲する。高台内の割り出しは浅い。



第25図 SK71・72(1)出土遺物実測図

皿（18～22） 18の口縁部は外反し、底径、見込み径は大きい。19～22は口縁部が内湾する平底の皿で、胎土は灰白色、釉は黄みを帯びる。19～21は内面に蕉葉文が片切彫りされる。

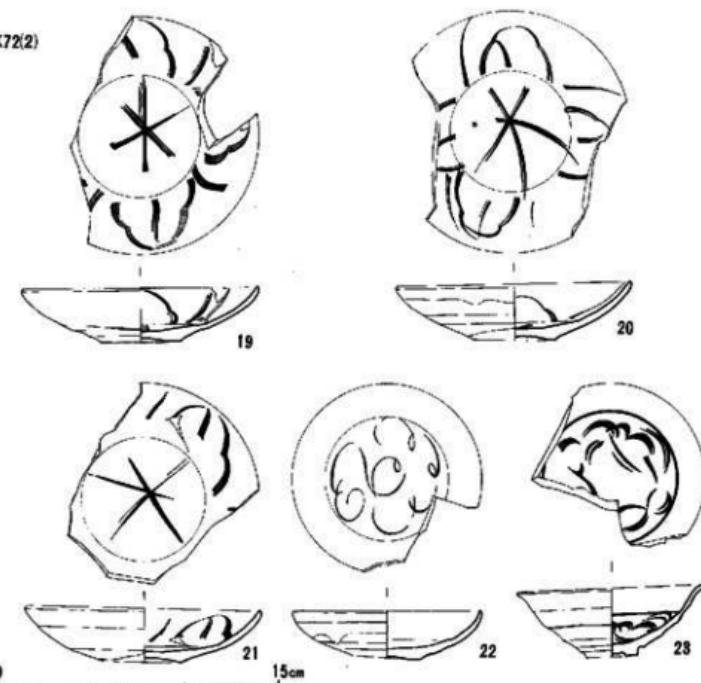
青磁 梗（23） 口縁部は外反し、内面に片切彫りの文様が施される。胎土は灰色で、オリーブ色透明ガラス質の釉が体部外面上半までかかる。

SK75出土遺物（第27図、図版27・28）

土師器

小皿（1～4） 底部の切離しはヘラ切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕がみられる。口径8.9～9.2cm、器高1.2～1.6cm、底径6.6～7.4cmを測る。

SK72(2)



第26図 SK72(2)出土遺物実測図

丸底杯（5～9） 内面を磨いて器面を平滑にし、口縁下にこてあて模が放射状にみられる。外底部にはヘラ切り痕、板状圧痕が残る。

瓦器 梗（10） 体部は丸みをもち、口縁部は直線的に外上方へ延びる。体部外面は横方向、内面は数方向にヘラ磨きされる。口縁端部から口縁部外面にかけて灰色、内面および体部外面下半は灰黒色に焼成されている。体部外面下半に粘土紐の継ぎ目がみられ、外底には「X」の線刻がある。

白磁

椀（11～14） 11は細い玉縁状口縁にするII類、12・13は内底見込みに沈圓線をもつIV類、14は口縁部が軽く外反するV類の椀で、内底見込みに段がつく。

高台付皿（15） 口縁部は外反し、口縁下内面に沈線をめぐらす。外底に「吳口」の墨書がある。

皿（16～20） いずれも平底の皿で、16は口縁部が内湾し、内面に蕉葉文が片切彫りされる。

17・18の口縁部は直線的に開き、底径、見込み径は大きい。19は口縁部が内湾し、20は口縁部が外反する。

(21) 外底に「小十口」の墨書がある。

陶器

四耳壺 (22) 高さ46cmを測る大型品である。口径は小さく、肩部は大きく張っている。やや上底の底部付近まで、施釉される。(23)は高台を削り出す四耳壺の胴部下半部であろう。

長瓶 (24) 口縁端部を丸くおさめる無頬長胴の壺で、黒色微粒子含の灰色の胎土に緑灰色釉。

SK78出土遺物 (第29図、図版29)

土器

底部の切離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿 (1) 口径9.3cm、器高1.3cm、底径6.5cmを測る。

杯 (2・3) 口径15.8・16.7cm、器高3.2・2.9cm、底径10.5・11.9cmを測る。

瓦器 梗 (4・5) 体部は丸みをもち、口縁部は軽く外反する。体部外面は横方向、内面は一方向にヘラ磨きされる。4の体部外面下半には、糸切離しの痕がみられる。漆黒色を呈する。5は体部中位から底部にかけて器肉が厚くなる。内面から体部外面上半にかけて灰黒色、体部外面下半は灰色に焼成されている。

白磁

碗 (6) 口縁部は直線的に外上方に延び、内底見込みは輪状に削り取られる。

皿 (7) 口縁部が内側する平底の皿である。

黒釉陶器 碗 (8) 口縁部が外反する天目碗で、胎土は白色砂粒を含み灰色、釉は黒褐色を呈する。

SK84出土遺物 (第29図、図版29)

土器

底部の切離しは糸切りで、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。胎土には細かい金雲母を含む。

小皿 (9・10) 口径7.8・8.4cm、器高1.2cm、底径6.0・6.4cmを測る。

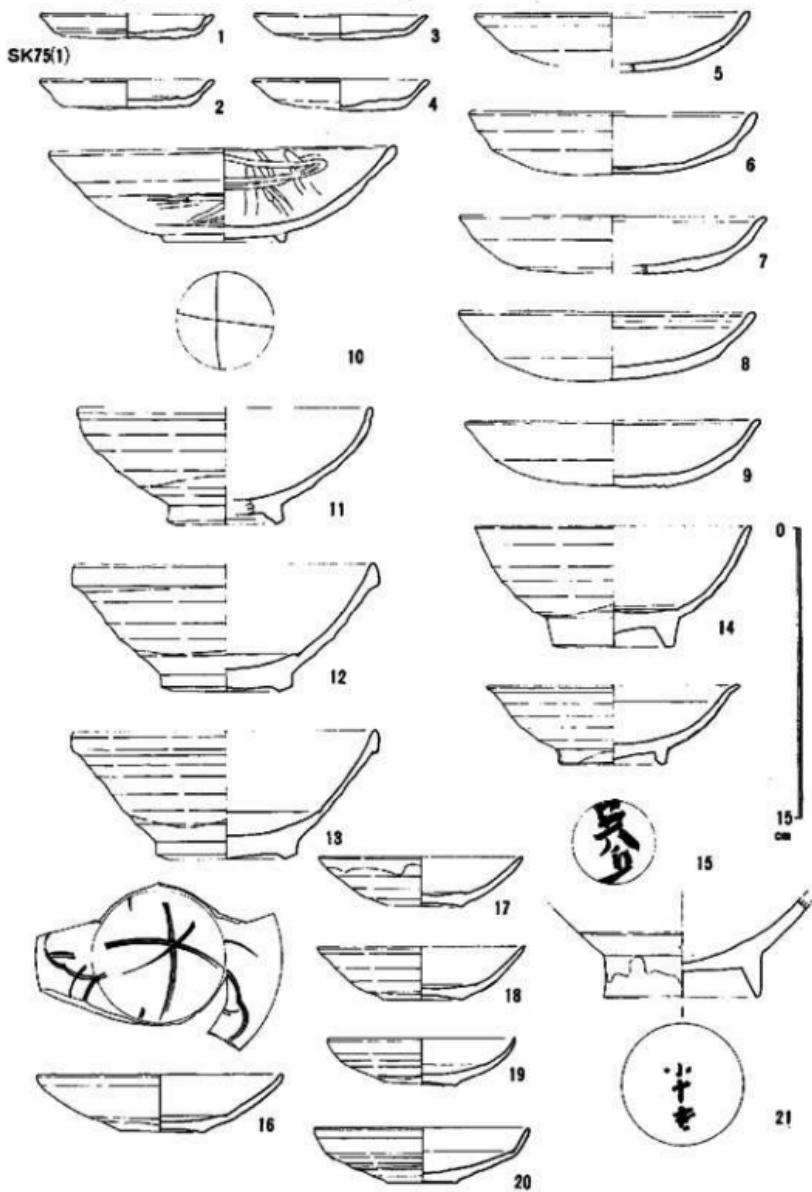
杯 (11) 口径12.3cm、器高2.5cm、底径8.0cmを測る。

白磁

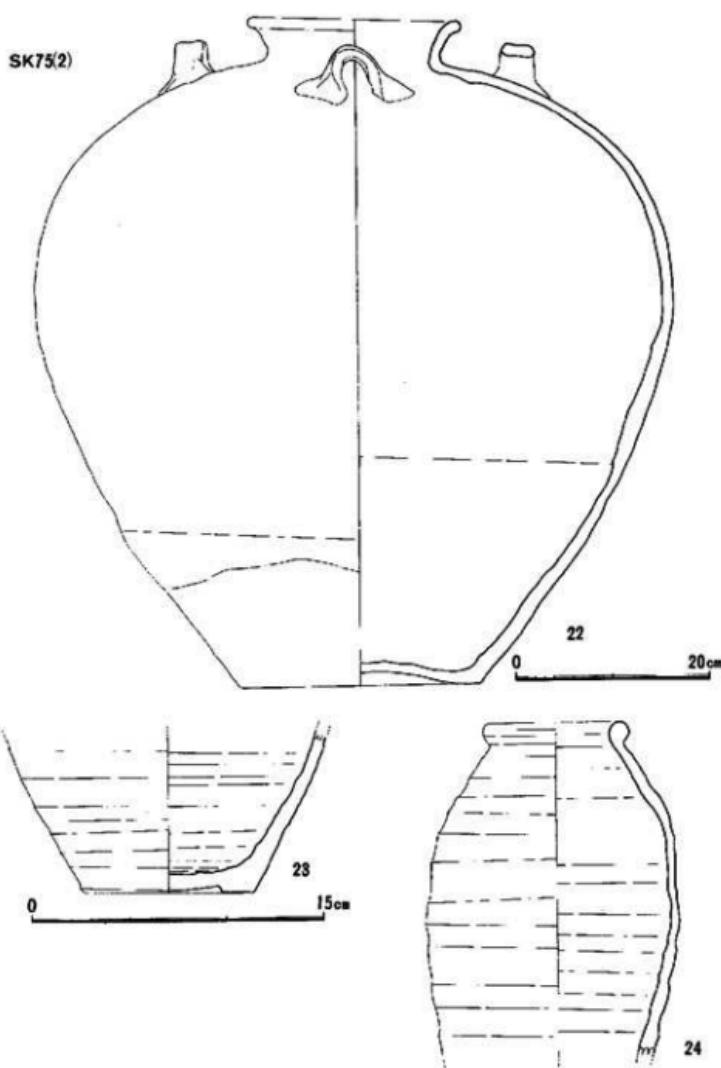
碗 (12・13) 口縁端部を平坦にし、内底見込みは輪状に削り取られ、高台はやや低めの大碗である。13は体部内面の釉下に鉄彩、線刻の文様を施す。

皿 (14) 口縁部は外反し、内底見込みは輪状に削り取る。

陶器 鉢 (15) 口縁端部は平坦で内傾しており、目跡がみられる。胎土には黒色微粒子を含み、灰白色を呈する。口縁下内面から内底にかけて、光沢をもった暗茶褐色の釉がかかる。



第27図 SK75出土遺物実測図 (I)



第28図 SK75出土遺物実測図 (2)

包含層出土遺物（第30図、図版30） これまで述べてきた遺構出土遺物は今回の調査で出土した遺物の一部に過ぎない。ここでは、包含層出土遺物のうち見過ごしできないものを若干ながら述べていく。1・2は第II面掘り下げの際、3~9は第I面掘り下げの際に出土したもので、包含層の時期はそれぞれ11世紀後半~12世紀前半、13世紀後半~14世紀前半とみている。

青磁 梱（1） 内面に型押しの文様をもつ小振りの楕で、口縁下で畳出、大きく外反し、その内面に沈線を有する。胎土は黒色微粒子を含み灰色を呈する。オリーブ緑色の釉が全面にかかる。外底に目アトがみられる。

白磁 蓼葉炉（2） 外面に蓮弁を削り出す炉の上半部の資料で、胎土は黒色微粒子を含み灰色を呈する。内外面ともに化粧土、やや黄みを帯びた灰白色の釉が外面にかけられている。

青白磁 蓋（3） 天井部に花弁の文様を型押しする返りをもった小壺の蓋である。胎土は白色で、淡い青色の透明な釉が外面にかけられている。

青磁 楠（4） 内底見込みに鉄斑がみられる龍泉窯系青磁で、胎土は灰白色、釉は淡深緑色を呈する。

土器類

底部の切離しは糸切りで、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。胎土は精良で金雲母を含む。

小皿（5・6） 口径7.6cm、器高1.3~1.4cm、底径5.7~6.2cmを測る。

杯（7） 口径12.2cm、器高2.0cm、底径8.6cmを測る。

青磁 小鉢（8） 体部外面に蓮弁を削り出し、内底見込みに双魚文を陽刻する龍泉窯系青磁である。胎土は灰白色、釉は淡深緑色を呈し、全面施釉の後高台疊付の釉を搔き取る。

陶器 小壺（9） 体部外面上半に双龍火炎珠を陽刻する高さ5.4cmの綠釉の小壺である。胎土は木目が細かく、淡黄白色を呈する。

鋼鏡（第30図、第1表）

初鉄年代、出土層位、地区は第1表に示した。

墨書陶磁器（第31図、図版30） 輸入陶磁器の外底に墨書きもつもので、その多くは判読不能

白磁

楕（1~3） 1~内底見込みに沈線をもつIV類底部片、判読不能。2~内底見込みに沈線をもつV類底部片、「圭号」。3~内底見込みを輪状に削り取りとするVI類底部片、判読不能。

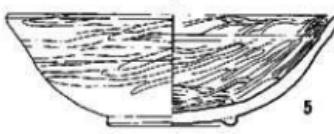
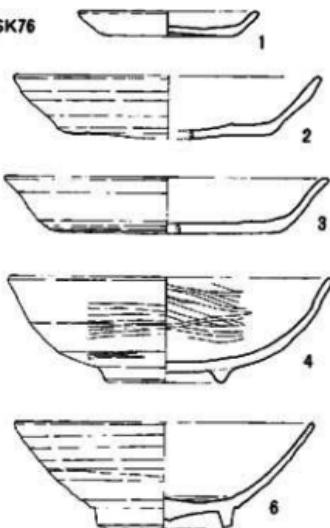
高台付皿（4~6） 4~「劉」。5~判読不能。6~内底見込みを輪状に削り取り、判読不能。

皿（7） 平底の皿、判読不能。

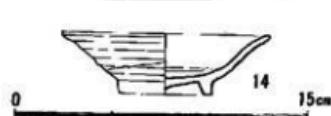
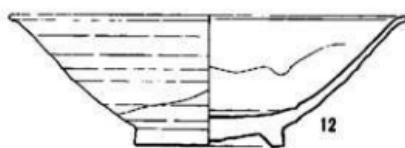
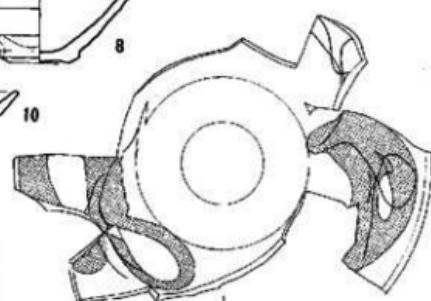
青白磁（8） 器種不明、判読不能。

青磁

SK76

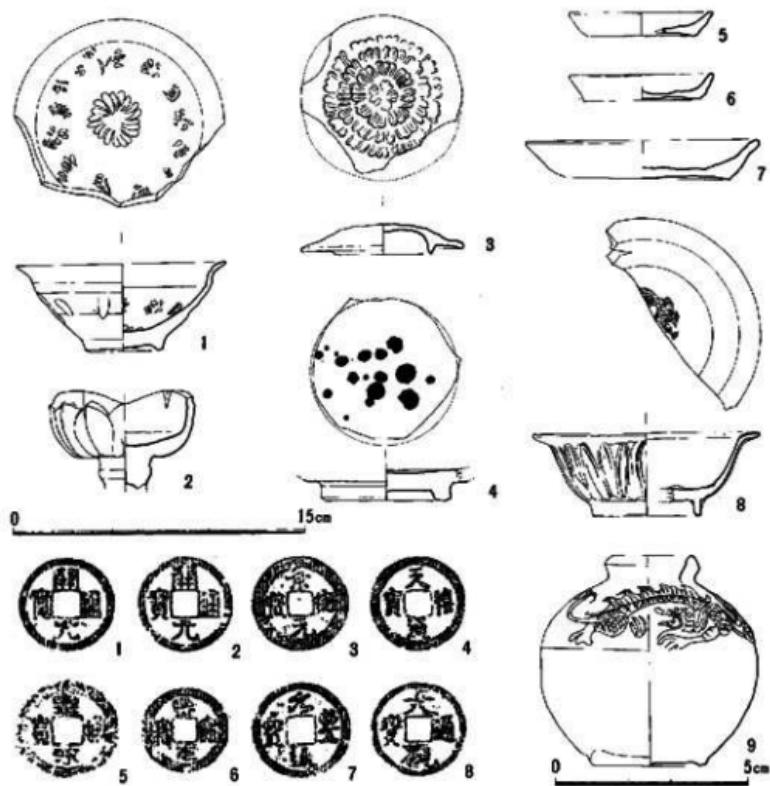


SK84



0 15cm

第29図 SK76・84出土遺物実測図



第30図 包含層出土遺物実測図・銅錢拓影

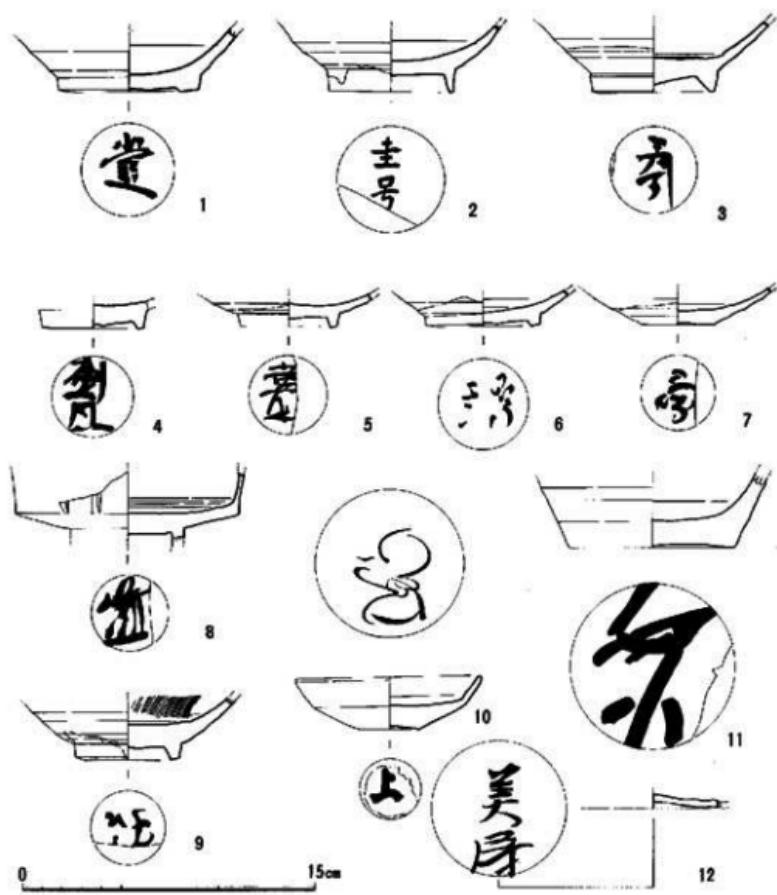
番号	銭種	初鋳年代	出土層・地区	番号	銭種	初鋳年代	出土層・地区
1	開元通寶	621	I面下・C-1	5	皇宋通寶	1039	I面下・B-3
2	開元通寶	621	I面下・C-6	6	熙寧元寶	1068	I面下・B-1
3	景德元寶	1004	I面下・C-6	7	元豐通寶	1078	I面下・B-1
4	天祐通寶	1017	I面下	8	大觀通寶	1102	I面下・A-4

第1表 出土銅錢一覧表

椀（9） 体部内面に薔薇状の工具で文様を施す。判読不能。

皿（10） 内底にヘラ状の工具で文様を施す龍泉窯系青磁、「上」。

陶器（11・12） 11-判読不能。12-「美口」。



第31図 墓書拘磁器実測図

V 小 結

今回の調査は面積が限定され遺構が密集していたため、各時期の居住空間を再現するまでにはいたらなかった。明確に砂層を追うことができた第IV面を除く第I面～第III面では標高による人為的層位に大まかな層位を設定して遺構の検出にあたったが、調査区に西側では下面と同

時期の遺構が検出される傾向にあり、各時期の生活面は東に向かって傾斜している。従って、上面での検出漏れもあわせて各面での検出された遺構は明確に時期分けされたものではない。柱穴も多数検出されたが、井戸、土壙とその大部分が重複しており、建物の復元は困難である。ここでは、IV章で述べた遺構の出土遺物からみた年代観を示し、国際貿易都市博多に受容された輸入陶磁器流入の画期について略述することとする。

S E81井戸は8世紀前半、S E82井戸は9世紀前半に時期を求められる。S E82井戸では、越州窯系白磁、越州窯系青磁、緑釉陶器（土師質、防長地城で生産されたものか。）が、僅かながらみられる。S E58土壙は出土した黒色土器から11世紀前半に時期を求められる。輪状高台で、外底に目跡がみられる越州窯系青磁が共伴している。S E82井戸・S K58土壙の段階では輸入陶磁器がみられるものの、大量に輸入されるまでには至っていない。

11世紀後半になると、どの遺構からも白磁が大量に出土するようになる。越州窯系青磁はみられなくなり、龍泉窯系や同安窯系の青磁が多く出土するようになる12世紀中頃までは博多近辺では一般的な村落におよぶまで、ほとんど「白磁単純の時代」とでもいっていいような様相を呈する。一方で、都市遺跡博多では、「白磁単純の時代」にあって天目碗、青白磁碗・皿、連江窯系青磁碗等、近辺ではあまり見受けられないものがかなりの頻度で出土している。それらは、青白磁を除いて外面の削り、胎土が粗く、造りは丁寧とはいえない量産品であるが、11世紀後半から12世紀中頃まで博多に居住していた宋商人向けに交易されたものであろう。特に、天目碗の博多とその近辺での出土する頻度の差異は、中国と日本における飲茶の風習の有無と深く結びつくものであろう。日本の博多以外で天目碗の出土が一般化するのは、13世紀後半以降であり、1195（建久6）年に宋人居住区「宋人百堂」跡地に聖福寺を建立した榮西による茶の伝来の伝承に沿うものである。今後、那珂川と御笠川にはさまれた河口部に立地する国際貿易都市博多における11世紀後半から12世紀中頃までの遺構出土の輸入陶磁器（その外底部に記された墨書等の文字資料を含めて）の組成、分布を追っていくことによって、宋人居住区「宋人百堂」の範囲を把握することも可能であろう。11世紀後半から12世紀中頃までの龍泉窯系や同安窯系の青磁がまだ大量に出土しない「白磁単純の時代」にあって、博多遺跡群では底部が糸切り離しの土師器杯・小皿が太宰府を中心とする近辺とは異なりよくみられる。底部がヘラ切り離しの土師器杯・小皿だけの遺構もみられることから、ヘラ切り離し単純期からヘラ・糸切り離し混在期、糸切り離し単純期へと移行する流れとは別に、内外の交易の中心である都市遺跡の性格上、特殊な移入品を除外しても土器製作工人集団の多極化、流通圏の重複も考慮にいれねばならないだろう。技法に大きな差が見出せない以上、胎土、微妙な形態上の特徴など近辺の資料もあわせ詳細に吟味・検討を重ね、器種を分類するとともに系統も分類していく必要がある。なお、主な遺構出土の土師器群の法量変化は第4回下に示した、各時期の共伴遺物の推移を追っていく上で、参考にされたい。

持団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	持団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	持団番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
SE28				27	8.9	1.0	7.5	61	13.6	3.0	9.0
土師器小皿				28	8.8	1.2	6.4	62	13.6	2.9	9.0
1	8.5	1.2		29	8.8	1.2	6.4	63	13.5	2.9	9.4
2	8.7	7.1	5.4	30	8.8	1.2	6.9	64	13.5	3.2	9.3
SE46				31	8.8	1.3	6.0	65	13.7	2.7	9.7
土師器九底杯				32	8.9	1.2	6.2	66	13.7	2.7	9.4
8	15.0	3.2		33	8.8	1.2	6.5	67	13.6	2.9	9.8
SE47				34	8.7	1.4	6.6	68	13.7	2.9	9.2
土師器小皿				35	8.8	1.2	6.7	69	13.6	3.1	9.2
1	8.4	1.2	6.2	36	8.7	1.4	6.7	70	13.8	2.9	9.9
2	8.3	1.2	6.3	37	8.9	1.2	6.3	71	13.8	2.9	9.8
3	8.3	1.3	6.2	38	8.8	1.1	6.6	72	13.8	2.9	9.8
4	8.4	1.1	6.0	39	8.9	1.3	6.6	73	13.9	2.5	9.5
5	8.5	1.2	6.2	40	8.9	1.4	6.9	74	13.9	2.7	9.4
6	8.5	1.2	6.1	41	8.9	1.1	5.7	75	14.0	2.8	9.1
7	8.4	1.3	6.3	42	8.8	1.2	6.7	76	14.0	2.9	9.5
8	8.5	1.1	6.4	43	9.0	1.4	6.8	77	14.1	2.9	9.6
9	8.6	1.1	6.9	44	9.0	1.4	7.3	SE52			
10	8.4	1.4	6.2	45	9.1	1.7	6.7	土師器小皿			
11	8.6	1.3	6.1	46	9.1	1.3	6.5	1	9.4	1.0	7.0
12	8.5	1.2	6.3	47	9.1	1.3	7.1	SE60			
13	8.6	1.3	6.1	48	9.2	1.0	7.6	土師器小皿			
14	8.6	1.2	6.2	49	9.1	1.2	6.6	6	9.1	1.4	7.6
15	8.6	1.3	6.4	50	9.2	1.2	7.0	7	9.3	1.1	7.2
16	8.6	1.2	6.4	51	9.0	1.3	6.8	SE81			
17	8.5	1.3	6.5	52	9.3	1.0	7.3	須恵器杯蓋			
18	8.6	7.3	6.5	土師器杯				1	(13.2)	2.8	
19	8.7	1.2	6.2	53	13.3	2.5	9.1	2	(14.6)	1.7	
20	8.8	1.1	6.3	54	13.3	3.1	9.4	須恵器杯身			
21	8.7	1.2	6.6	55	13.4	2.8	9.3	3			7.8
22	8.7	1.3	7.0	56	13.3	2.7	9.6	4	(16.0)	(12.0)	
23	8.6	1.3	6.2	57	13.5	2.7	10.1	5	(17.8)	4.6	(11.8)
24	8.7	1.4	6.0	58	13.6	2.8	9.6	土師器甕			
25	8.2	1.5	5.7	59	13.5	2.8	9.2	6	(17.6)		
26	8.7	1.4	6.6	60	13.5	2.7	9.5	SE82			

第2表 出土土器計測表(I) (括弧内の数値は復元値)

持団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	持団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	持団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
土師器杯				1	8.5	1.7	7.7	内黒土器鉢			
7	(12.6)	3.6	(7.0)	2	(9.2)	1.6	(7.2)	1	(30.3)	11.7	16.4
8	(13.6)	3.4	(7.5)	3	8.6	1.2	6.6	黒色土器椀			
土師器椀				4	(10.6)	1.3	(8.4)	2	(20.0)		
9			9.7	土師瓢杯				SK61			
内黒土器椀				5	(15.3)	2.8	(10.6)	土師器小皿			
10			(7.0)	6	(15.6)	2.9	(11.2)	4	8.9	1.2	6.8
須恵器杯蓋				土師器丸底杯				5	9.0	1.3	7.0
12	(17.1)			7	15.2	3.3		6	(9.6)	1.3	(7.4)
須恵器杯身				8	15.5	3.8		7	8.7	1.4	6.9
13	(13.6)	4.0	(9.8)	9	15.9	3.1		8	8.9	1.0	6.9
SK35				10	(16.5)	3.3		9	8.9	1.2	6.9
土師器小皿				11	14.4	3.2		10	9.1	1.1	6.6
1	7.5	1.0	6.1	12	14.9	3.6		11	9.6	1.0	6.9
土師器杯				13	15.2	3.2		SK65			
2	11.8	2.4	8.7	SK41				土師器丸底杯			
SK37				土師器小皿				5	(16.0)	3.4	
土師器小皿				1	8.8	1.2	7.8	瓦器椀			
3	9.5	1.5	6.9	2	9.0	1.4	6.8	6	17.0	5.5	6.6
4	(9.9)	(1.6)	(7.3)	3	9.1	1.4	7.0	7	17.1	5.4	6.0
5	9.8	1.5	7.7	4	9.6	1.1	8.7	SK67			
6	(9.2)	1.2	(7.1)	5	8.7	1.1	6.2	研磨土器椀			
7	9.2	1.3	7.3	6	9.2	1.2	7.8	20	16.3	5.4	5.7
8	9.2	1.1	7.5	7	9.4	1.0	7.5	21	15.4	6.1	6.6
9	9.6	1.2	7.6	土師器杯				SK68			
10	(9.8)	1.0	(7.8)	8	13.7	2.7	9.5	土師器小皿			
11	(9.9)	1.4	6.3	9	13.9	3.6	9.8	1	8.9	1.2	7.3
土師器杯				10	14.6	3.2	10.0	2	9.0	1.4	6.6
12	15.8	2.9	10.8	11	14.7	3.0	10.3	3	9.3	1.5	7.6
13	(14.8)	3.4	(10.4)	土師器丸底杯				4	10.0	1.7	7.5
14	(15.9)	(2.7)	(11.0)	12	14.1	2.7		土師器丸底杯			
瓦器小皿				13	14.8	3.2		5	10.4	2.9	
15	10.4	2.1		14	15.1	3.3		6	15.3	3.4	
SK38				15	15.4			研磨土器椀			
土師器小皿				SK58				7	15.6	5.2	6.0

第3表 出土土器計測表(2)

(括弧内の数値は復元値)

拂図 番号	口徑 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	拂図 番号	口徑 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	拂図 番号	口徑 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
SK68				土師器丸底杯				瓦器碗			
土師器小皿				7	15.1	3.4		10	(18.1)	4.8	6.6
1	(9.4)	(1.6)	(6.1)	8	15.0	3.6		SK76			
瓦器碗				瓦器碗				土師器小皿			
2	(16.4)			9	(16.5)	5.3	6.8	1	9.3	1.3	6.5
SK78				SK72				土師器杯			
土師器小皿				土師器小皿				2	(15.8)	3.2	(10.5)
1	(9.8)	1.5	5.6	1	(8.8)	1.2	(7.0)	3	(16.7)	2.9	(11.9)
2	9.3	1.2	7.3	2	(9.0)	1.7	(7.5)	瓦器碗			
土師器丸底杯				土師器丸底杯				4	16.7	5.4	6.0
3	14.5	3.2		3	(14.0)	3.4		5	17.2	6.7	6.7
4	14.9	3.1		SK75				SK84			
5	(15.1)	3.3		土師器小皿				土師器小皿			
6	15.5	3.8		1	8.9	1.2	7.4	9	7.8	1.2	6.0
7	(16.0)	3.1		2	(9.0)	1.5	6.6	10	8.4	1.2	6.4
8	(16.5)	3.6		3	8.9	1.3	6.9	土師器杯			
SK71				4	9.2	1.6	7.0	11	12.3	2.5	8.0
土師器小皿				土師器丸底杯				C-3 I面下			
1	(9.6)	1.3	(7.0)	5	14.3	3.0		土師器小皿			
2	(9.2)	1.5		6	(15.0)	3.2		5	7.6	1.3	5.7
3	(9.2)	1.5	(7.1)	7	(16.0)	2.9	10.0	6	7.6	1.4	6.2
4	9.5	1.4	7.4	8	(15.5)	3.5		土師器杯			
5	(9.8)	1.9		9	15.4	3.4		7	12.2	2.0	(8.6)
6	(9.9)	1.5	(6.2)					(括弧内の数値は復元値)			

年代別	造拂番号	上師器小皿の法量平均値			上師器杯の法量平均値			備 考	共伴陶器		
		口徑	器高	底径	個体數	口徑	器高	底径	個体數	備 考	共伴陶器
1100-	SK68	9.3	1.5	7.3	4					ヘラ切り、丸底杯伴 白磁碗II、V1a・2c、ⅢV1b、	
	SK75	9.0	1.4	6.9	3					ヘラ切り、丸底杯伴 白磁碗II、V1a・2c、V1、V1a	
1150-	SK41	9.1	1.2	7.4	7	14.2	3.1	9.8	4	ヘラ系腹、丸底杯伴 白磁碗V2b、ⅢV1、V1b、V1b	
	SK37	9.5	1.3	7.4	5	15.8	2.9	10.8	1	系切り	ⅢV1b、V2、V1a、V1b、V1b、
1200-	SK81	9.0	1.2	6.9	7					系切り	陶器盤
	SE47	8.7	1.3	6.5	52	13.6	2.8	9.5	25	系切り	施乳空系青磁模I-5-b

*陶器器の分類は森田知恵・森田吉次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州考古資料研究会報第4号』1978
山本信人「北朝貿易品陶磁器の編年—大宰府出土例を中心として—」『貿易陶磁器研究No.8』1988に従った。

第4表 出土土器計測表(3)

図 版



1. 第Ⅰ面全景 (東から)

2. 第Ⅱ面全景 (西から)





2. 第IV面東半部（東から）



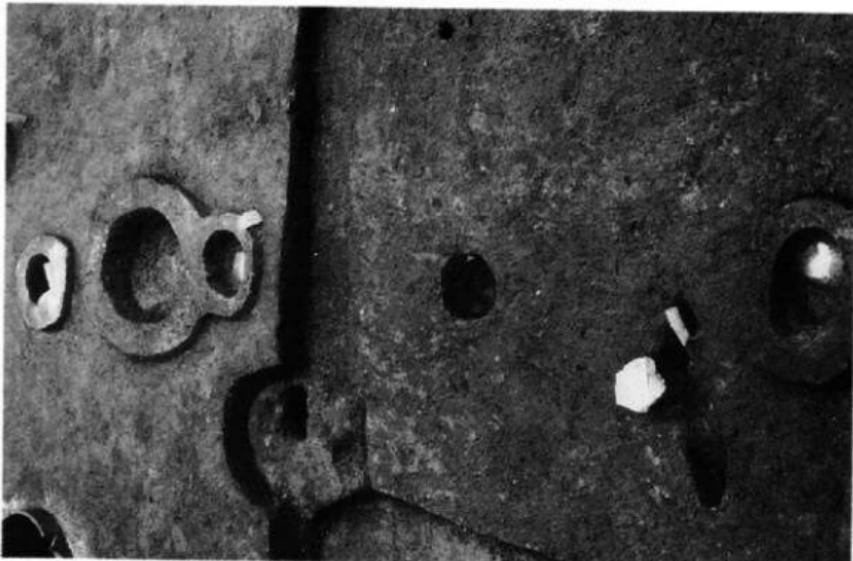
1. 第III面西半部（東から）



1. 第IV面東部（東から）



2. 第IV面北西部分（西から）



1. 第1面南東部分（東から）



2. 第1面鉄漆散布状況（北西から）



1. SE29井戸（南から）



2. SE52井戸（南から）

図版 6



1. SE59・60井戸（北から）



2. SE60井戸（西から）

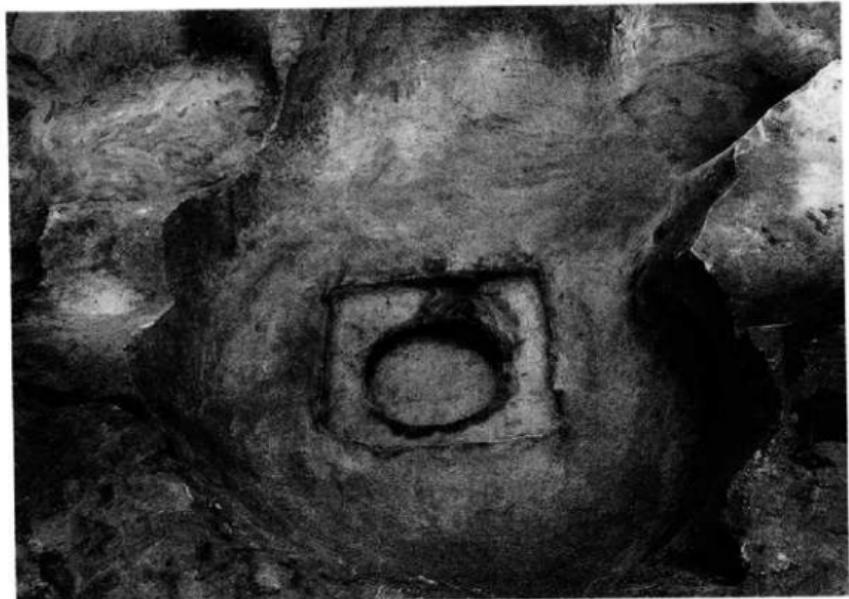


1. SE61井戸（北から）



2. SE73井戸（南から）

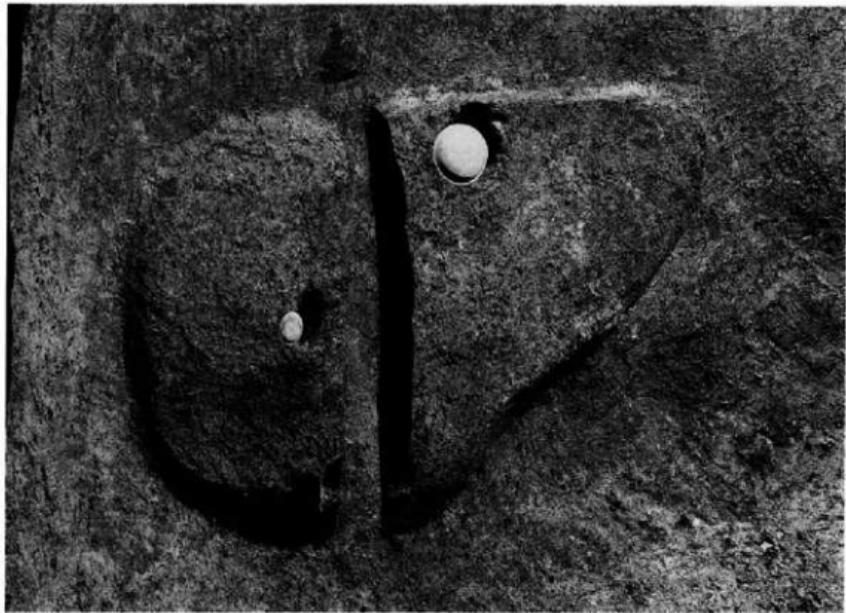
図版 8



1. SE81井戸（西から）



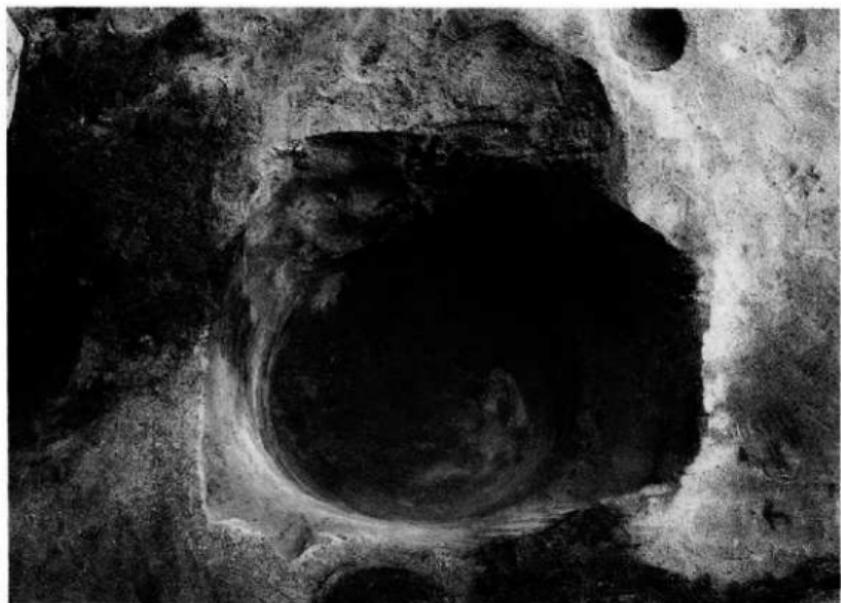
2. SE82井戸（西から）



1. SK35土壤（南東から）



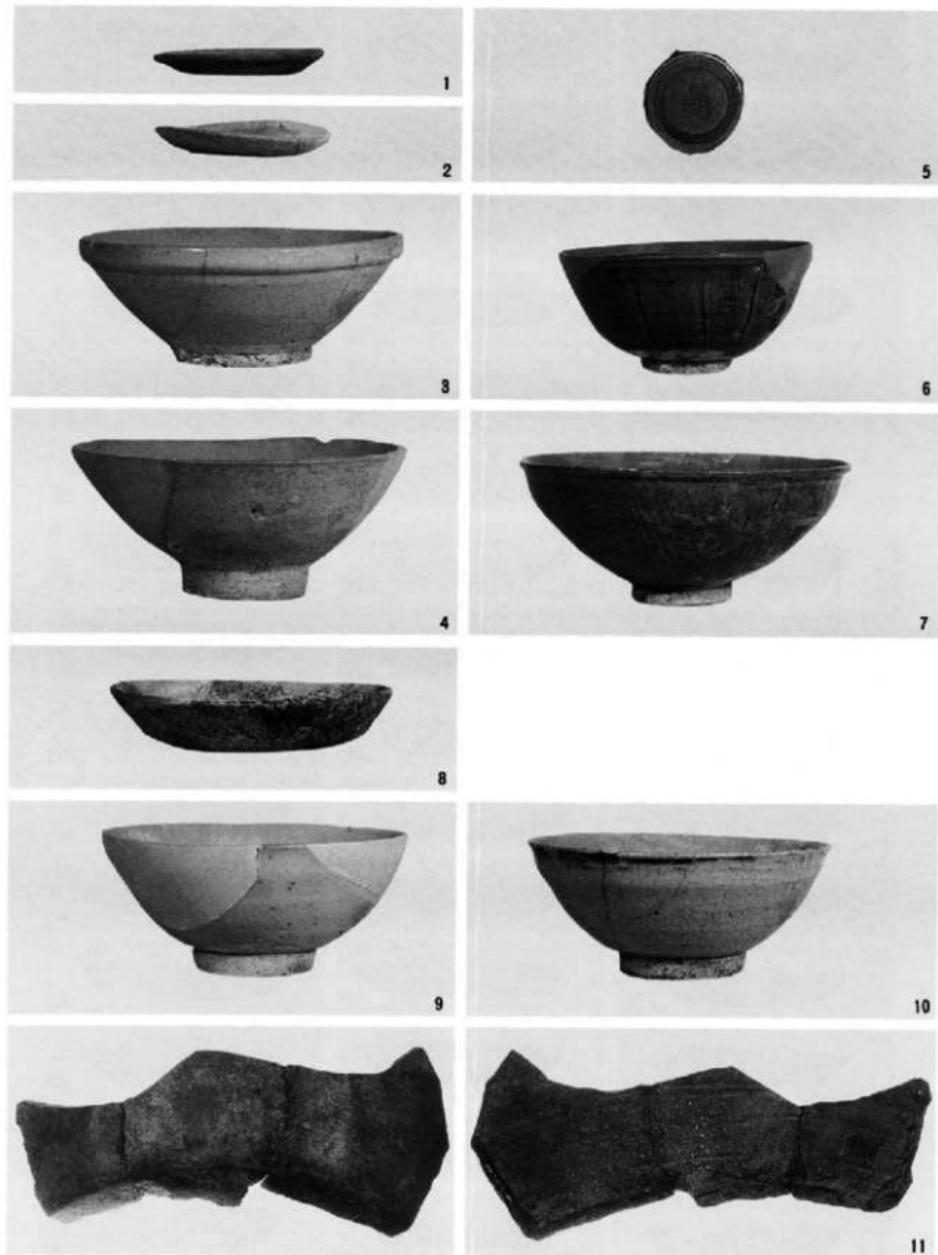
2. SK37土壤（東から）



1. SK38土壤（南から）

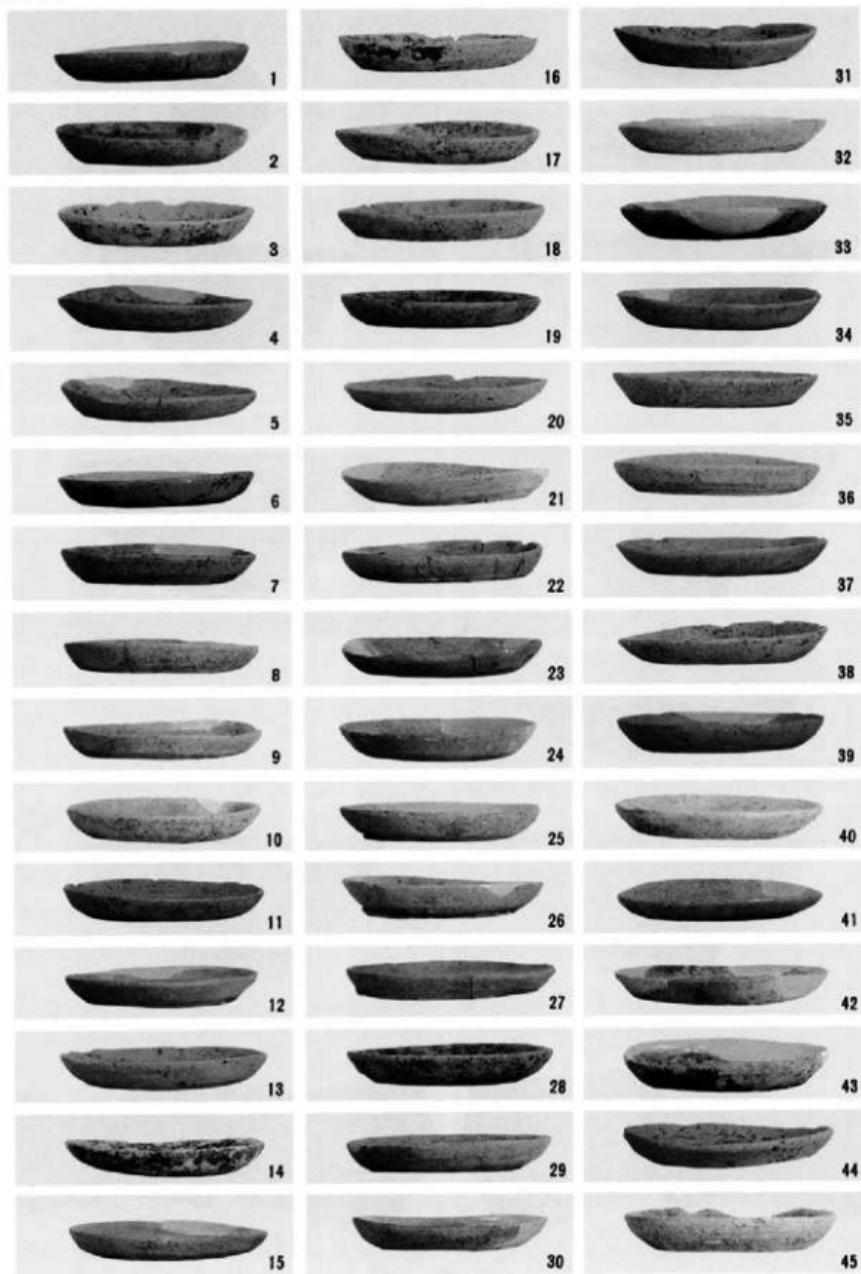


2. SK58土壤（西から）

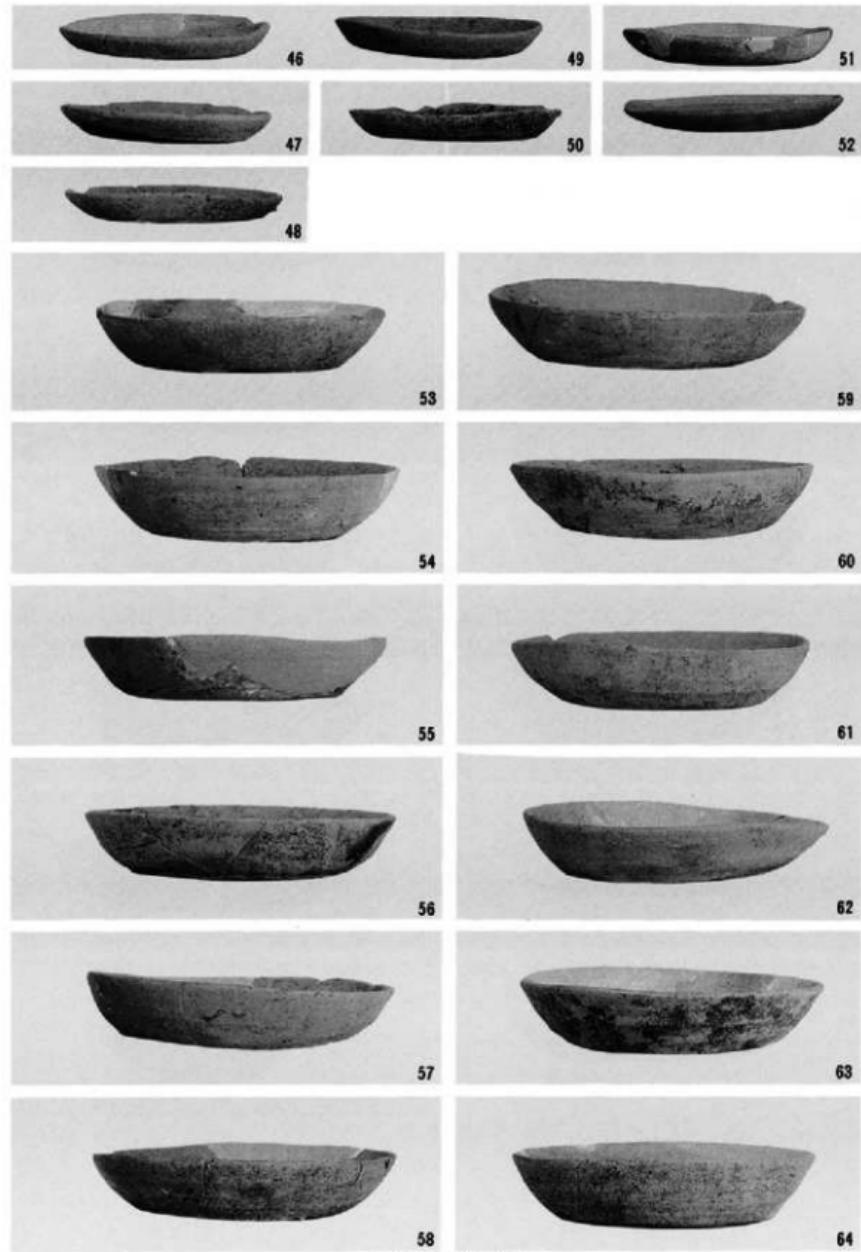


SE29-40出土遺物

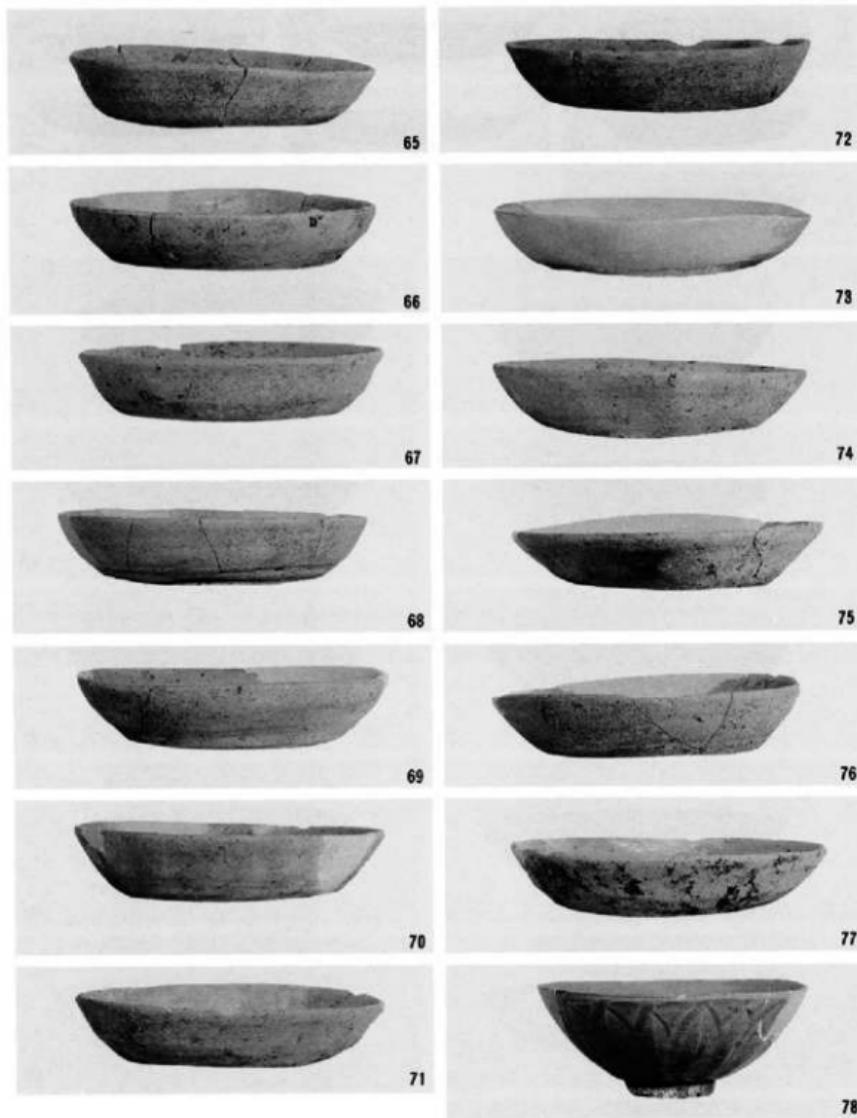
図版12

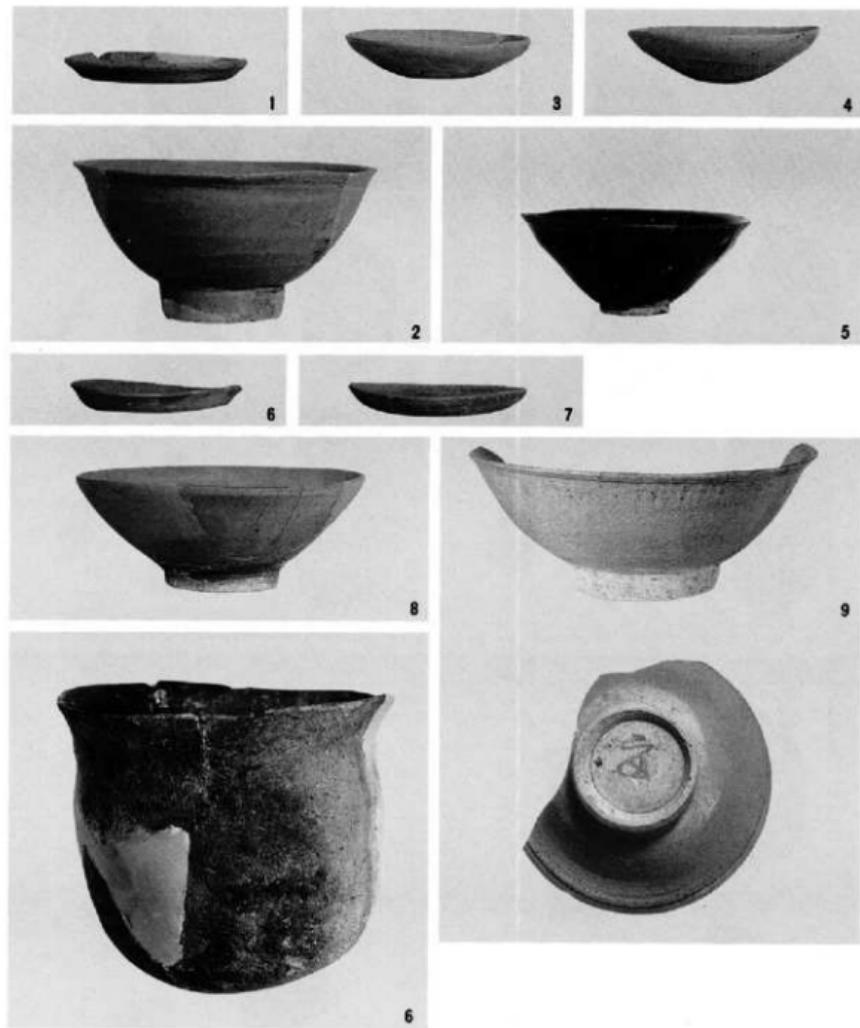


SE47出土遺物（1）

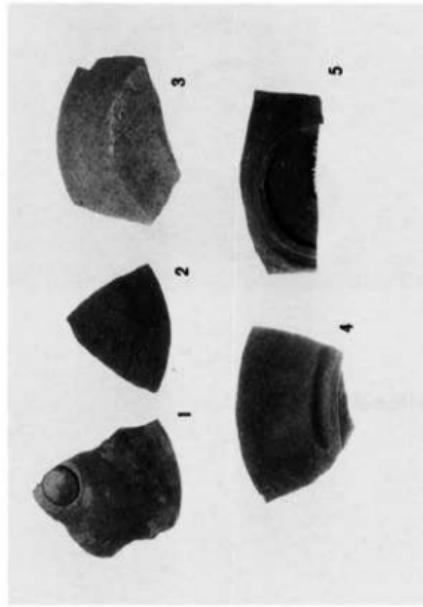
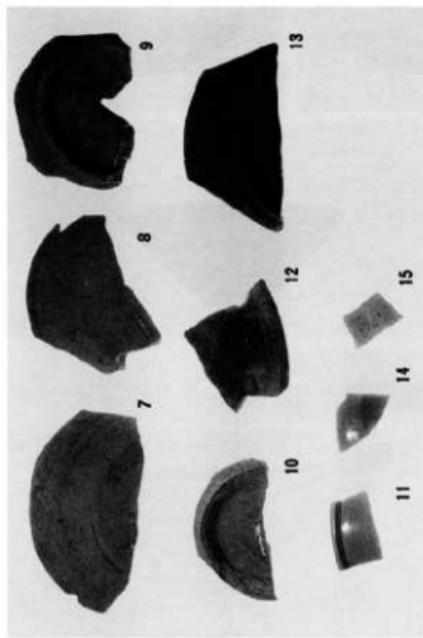


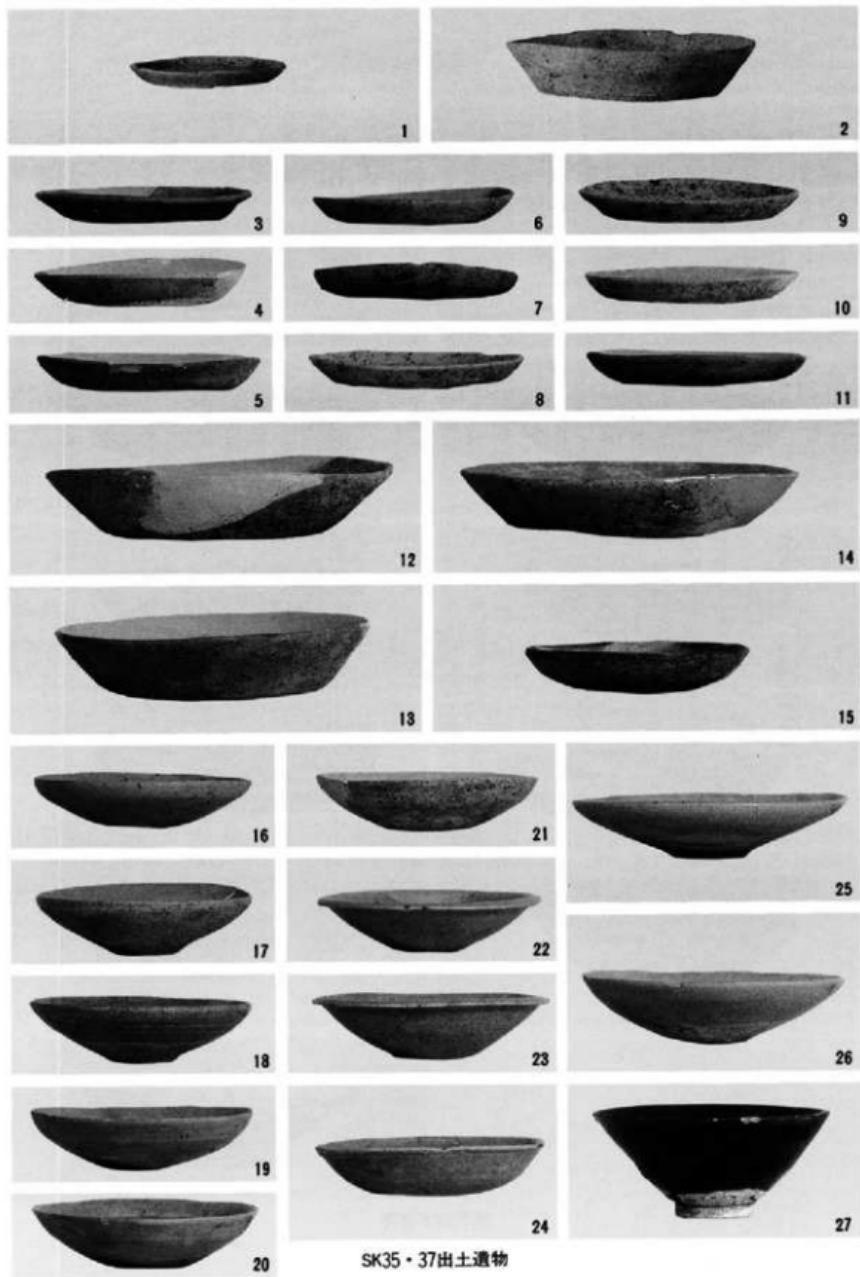
SE47出土遺物（2）





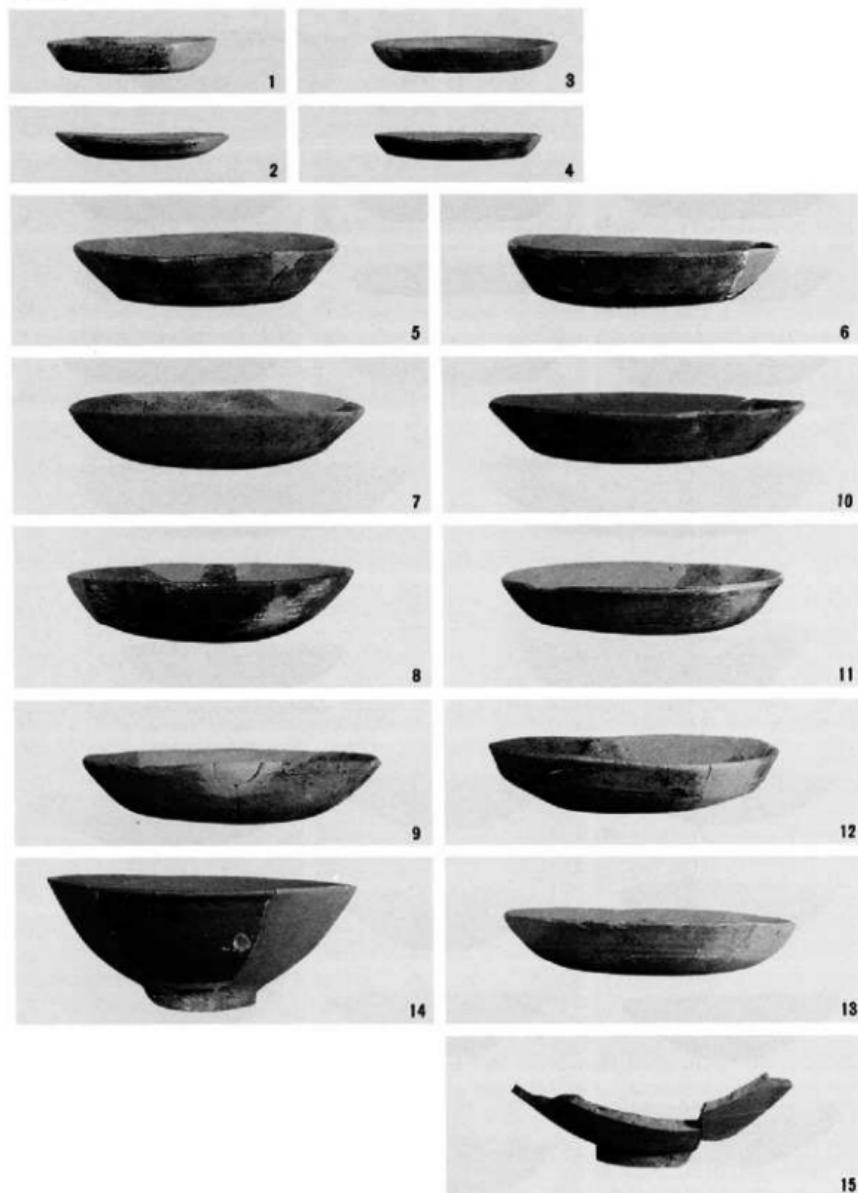
SE52・60・81出土遺物



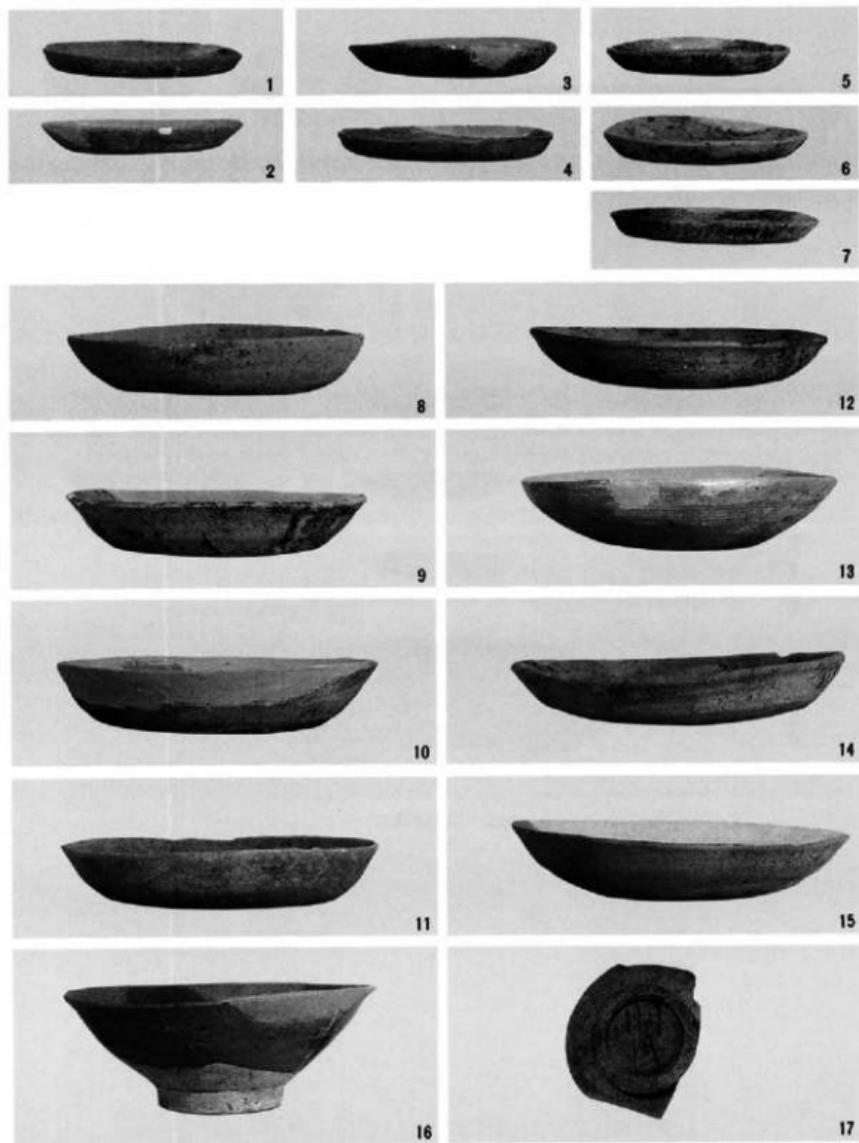


SK35・37出土遺物

図版18

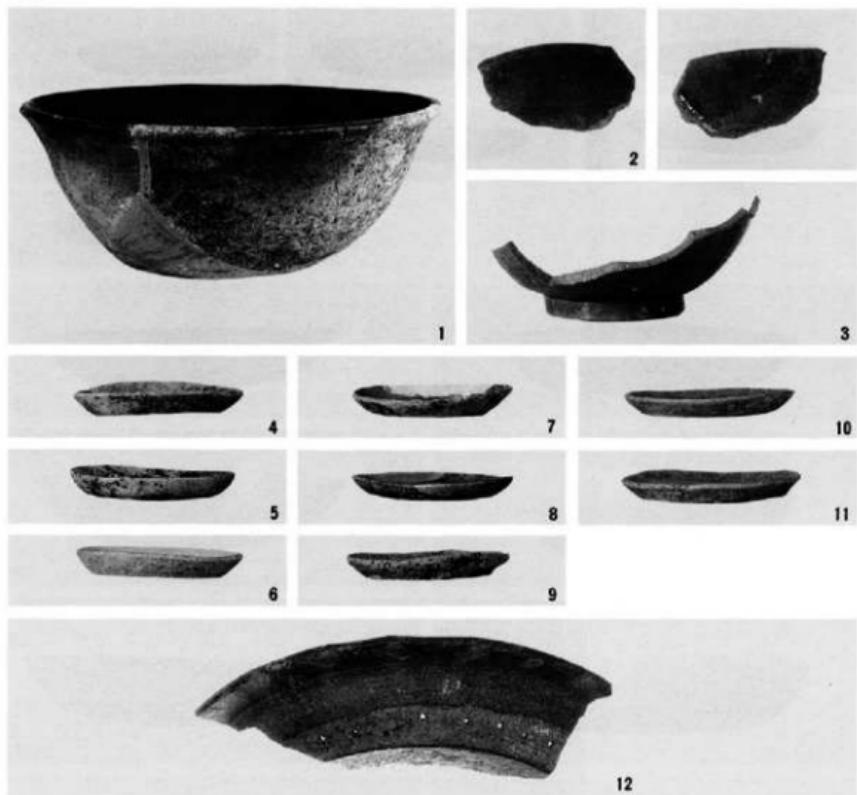


SK38出土遺物

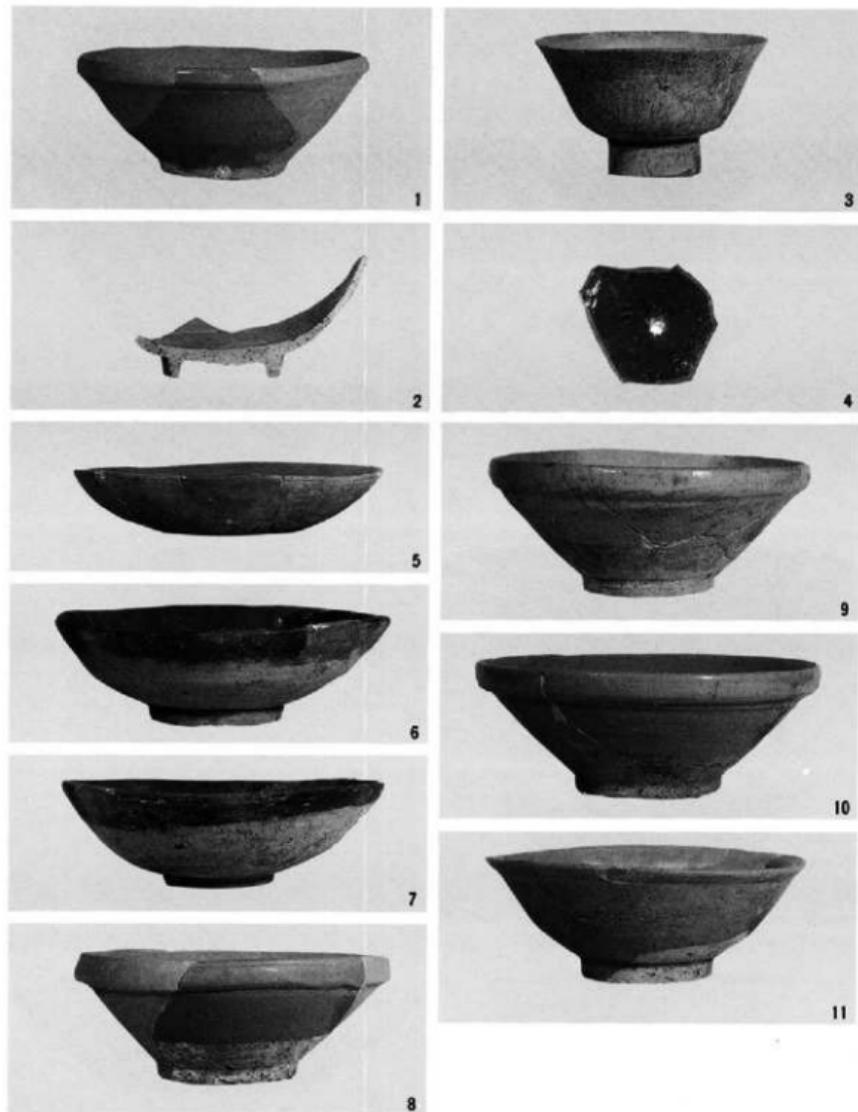


SK41出土遗物

圖版20

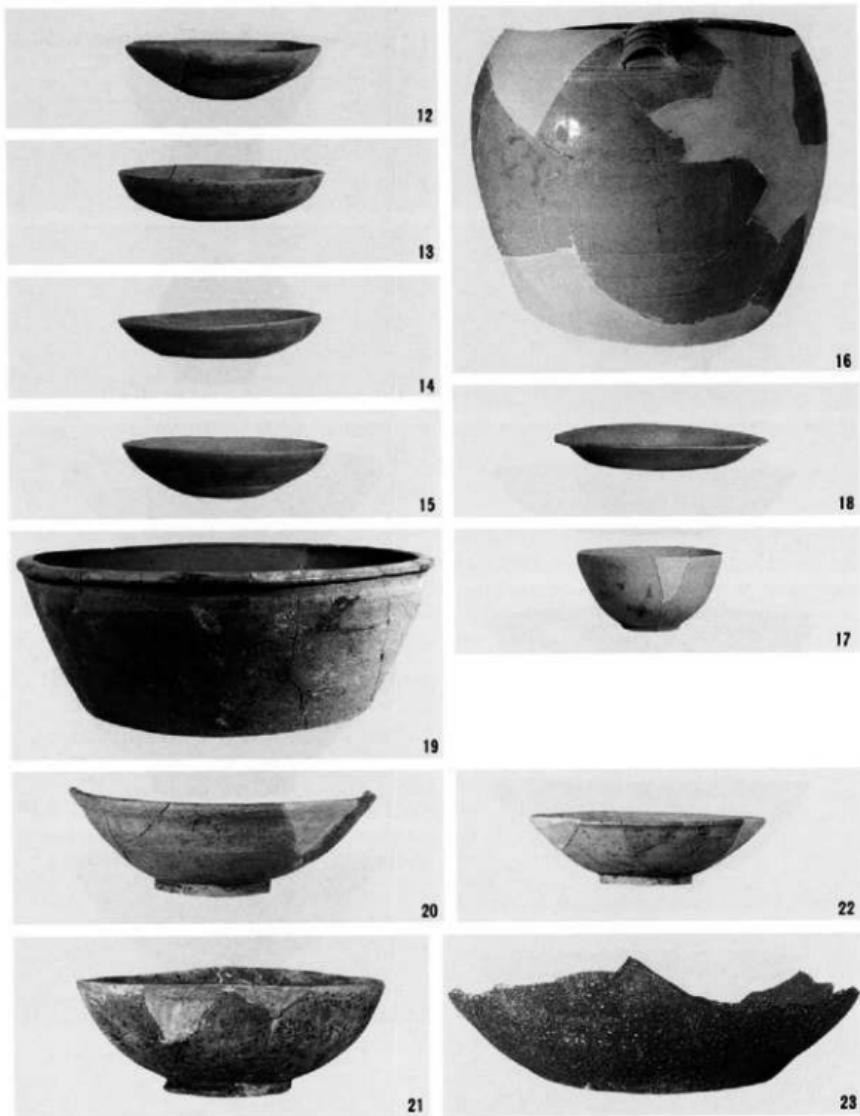


SK58·61出土遺物

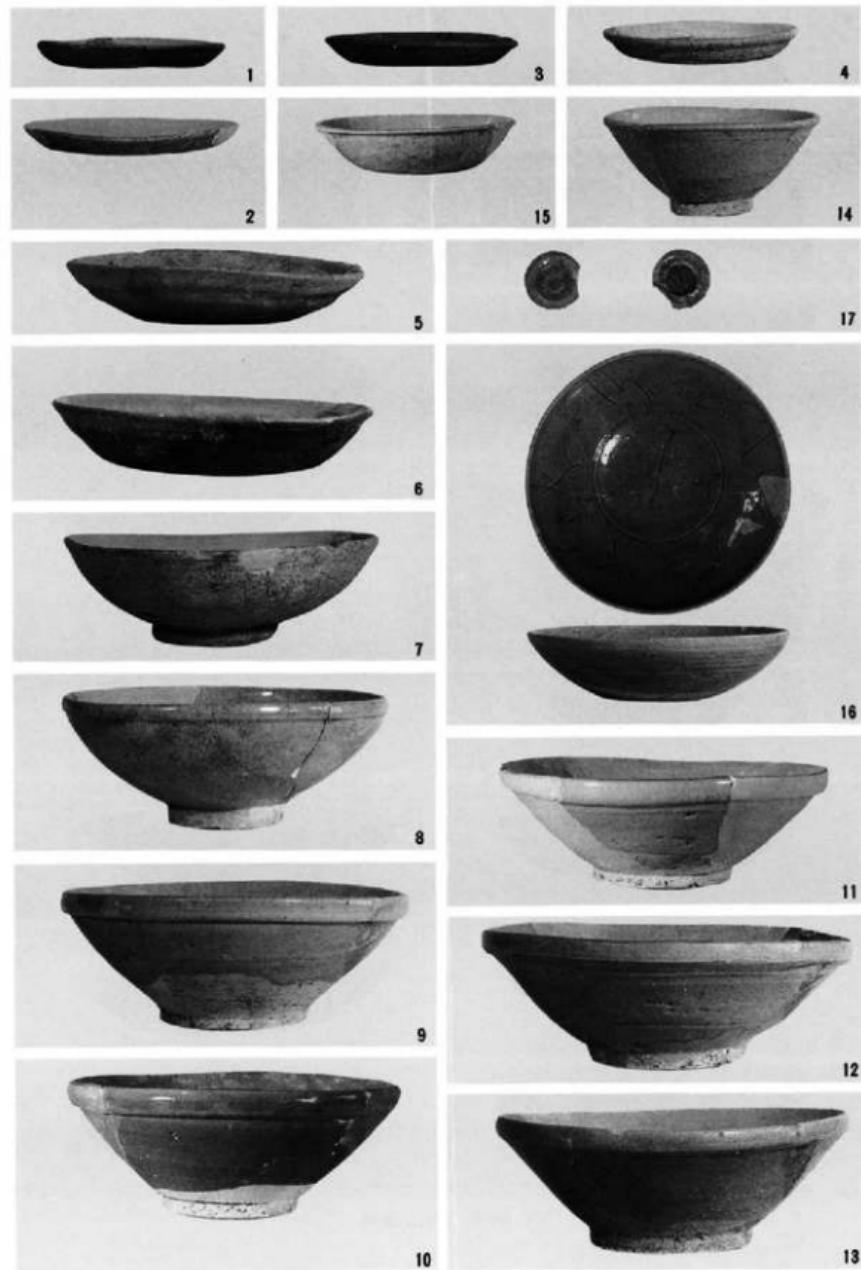


SK64出土遺物・SK65出土遺物（1）

图版22

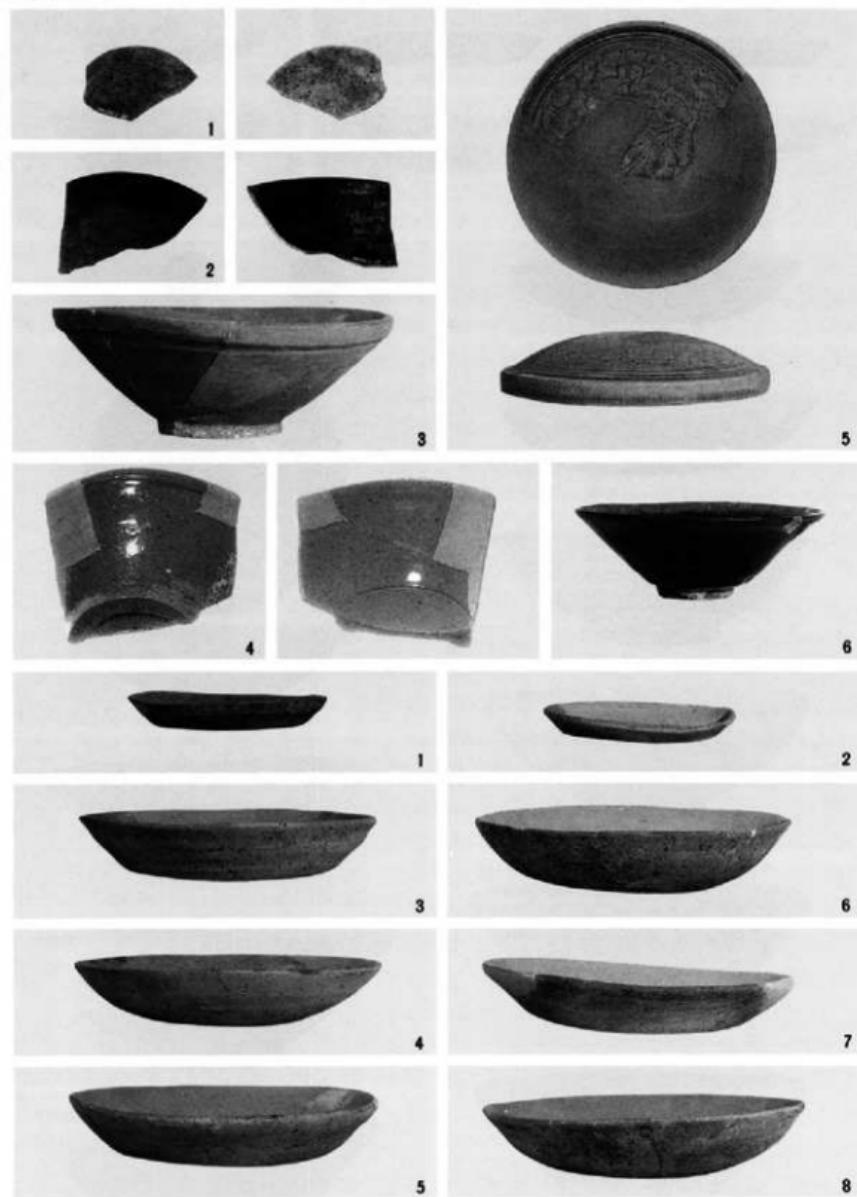


SK65出土遺物 (2)・SK67出土遺物

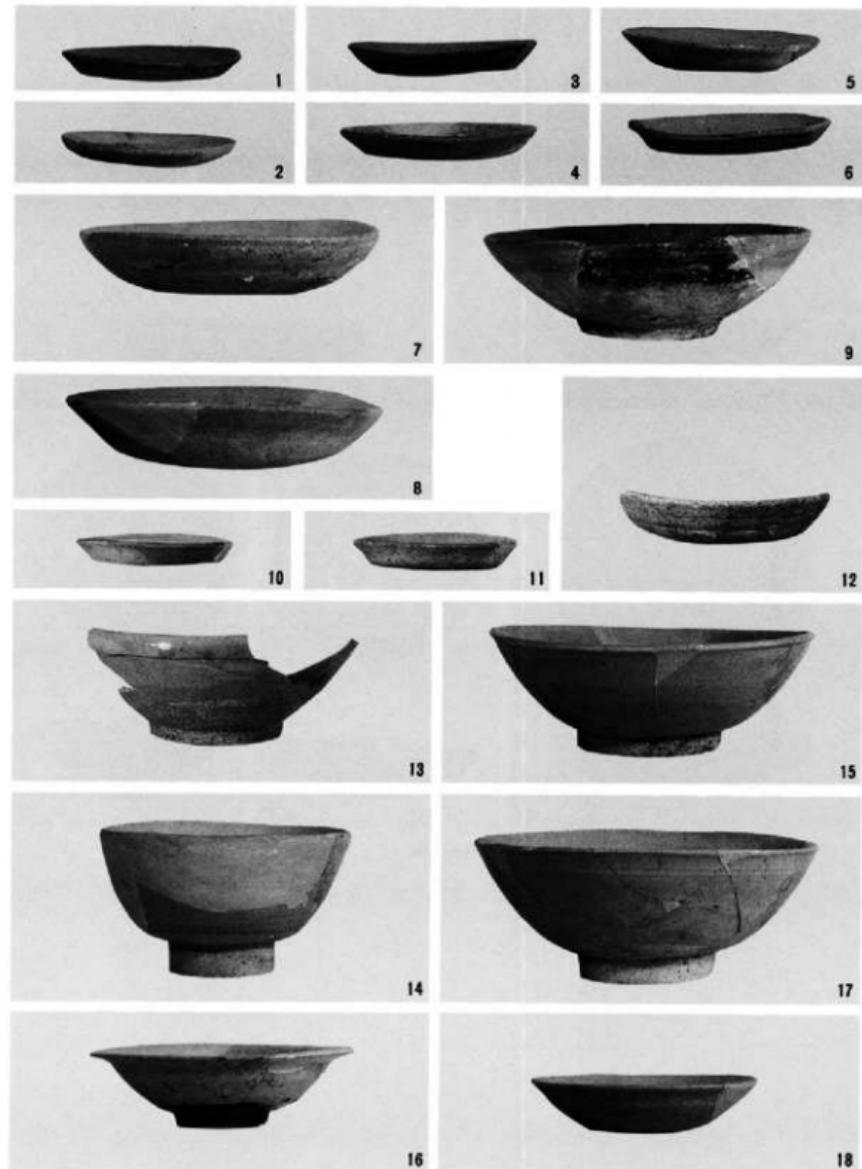


SK68出土遺物

図版24



SK69・70出土遺物



SK71·72出土遗物



19



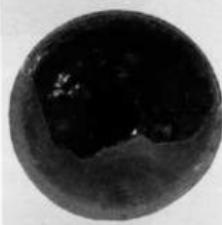
20



21

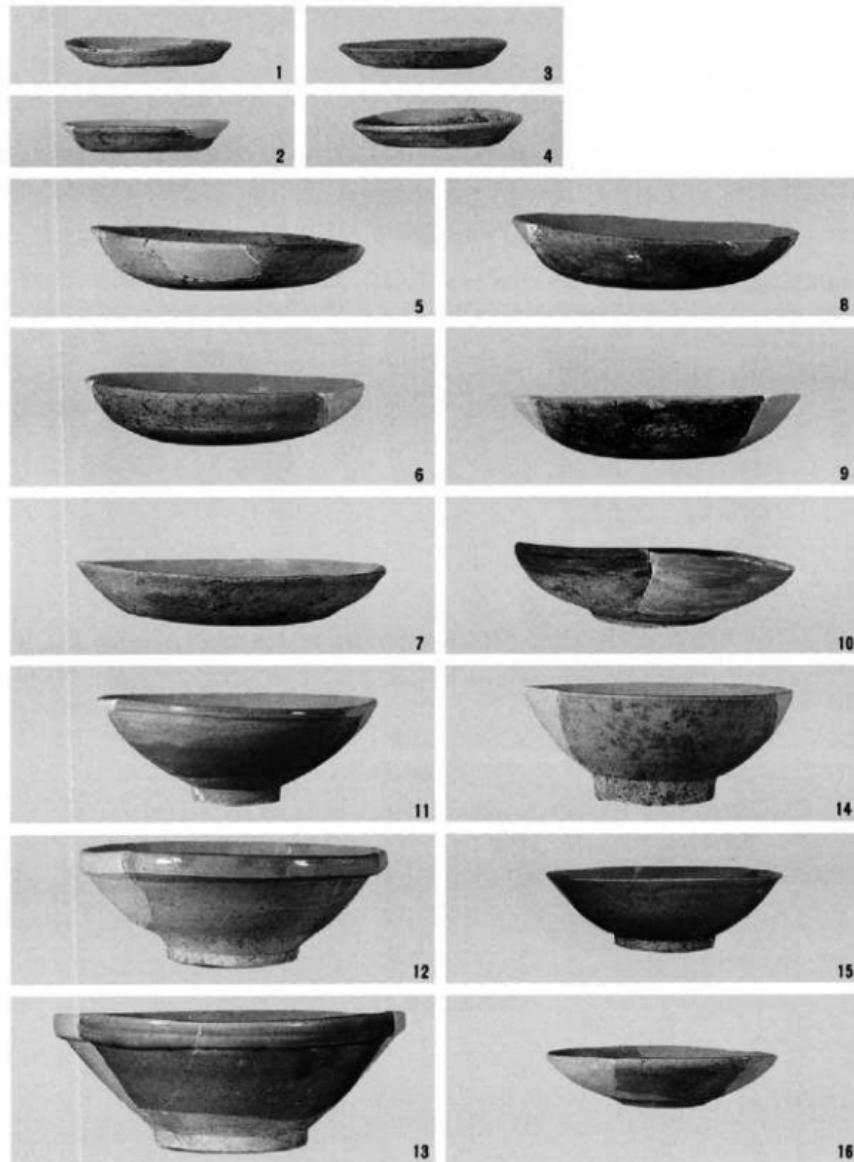


22



23

SK72出土遺物（2）

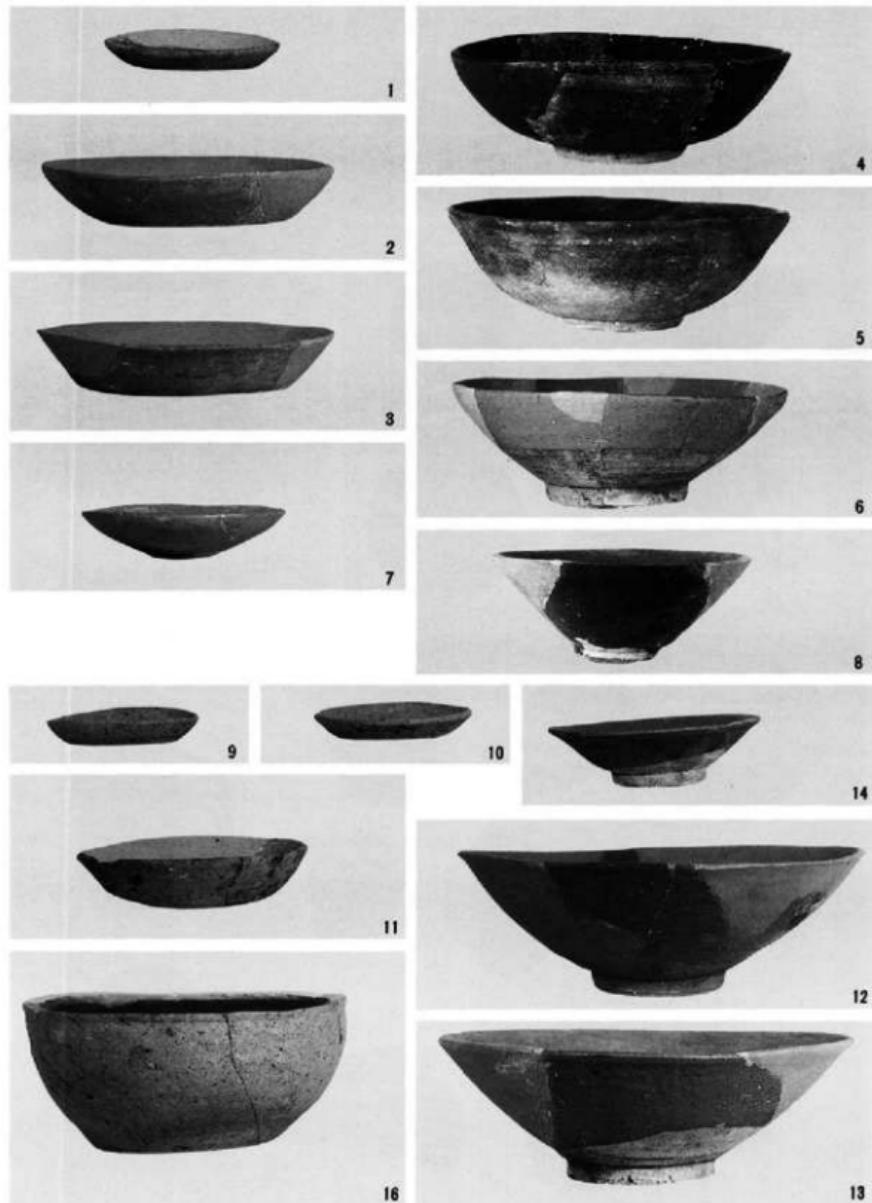


SK75出土遺物（1）

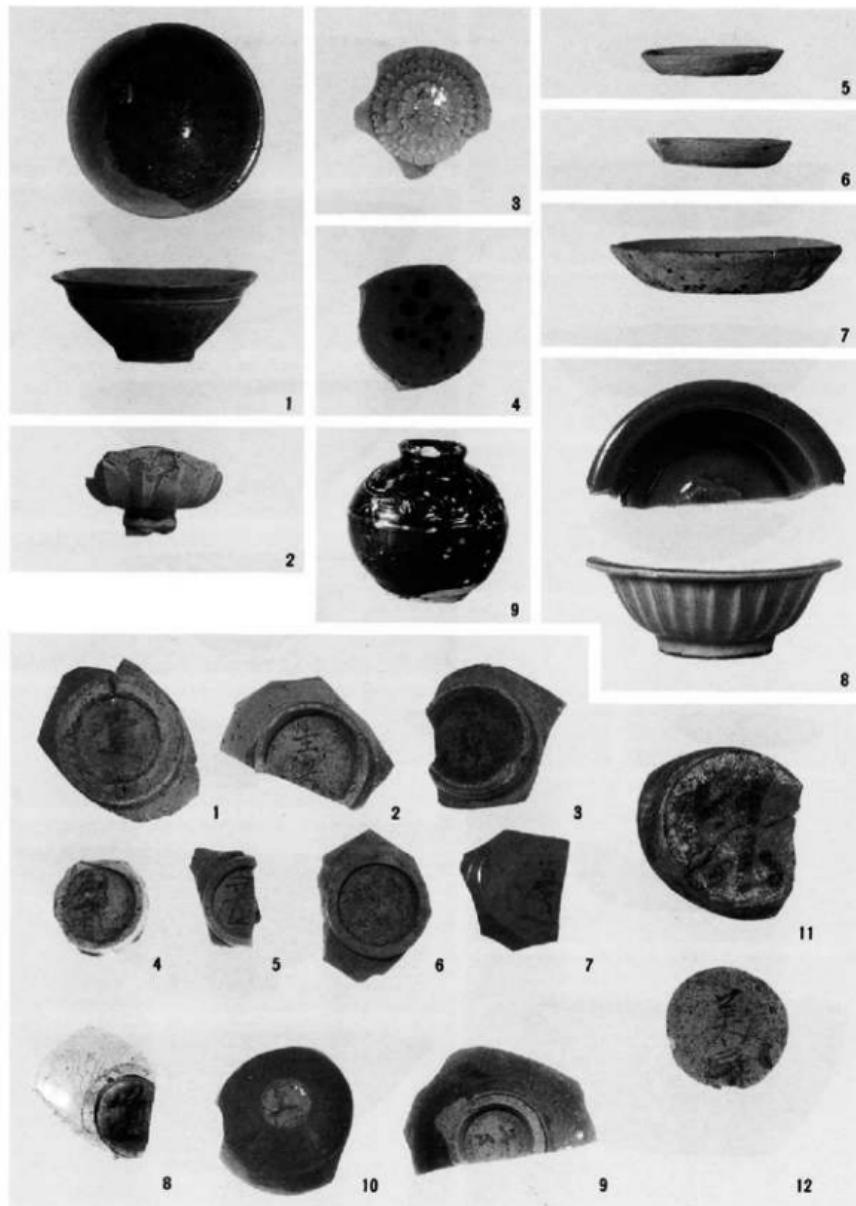
图版28



SK75出土遗物（2）



SK76·84出土遺物



包含層出土遺物・墨青陶磁器

博 多 19

—博多遺跡群第44次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第247集

1991年3月15日発行

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 大野印刷株式会社
